

「お神さんが、鳥渡入らしつて戴きたいとお云ひですよ。」

「さうか、今行く。」

お花が階下へ行くとき、権二は笑ひながら、

「愈々破裂かな。久能木君、階下へ行つて早く聞いて遣りたまへ。は、は。」

権二は嘲ける様に笑つて自分の室へ歸つた。

勝彌が階下の茶の間へ行つて見るとお喜和は澄ぬ顔を爲ながら、例の如く炬燵に埋り、

其と對してお須壽も炬燵に入つて居たが、如何したのか掛布団に頬を押當て、勝彌の方を

向かうとはしなかつた。

勝彌は腰を屈めて火鉢へ兩手を隠しながら、

「僕に談話があるツて、何様事です。」

お喜和は妙に切口上で、

「久能木さん、貴方他へ轉宿ツしやるツてますが、眞箇なんでせうね。」

「さうです。」

お須壽は顔を布団から放して、そら見た事かと云はないばかりに母を見た眼に涙が溢れて居るのを、勝彌もちらと認めて、

「他家へ轉宿ツしやるんですね。」と、念を押す。

「さうです。柏木君の家へ同居する事に爲たのです。」

「さうで御在ますツてね。」と、お喜和は布団に顔を附けて居るお須壽を見ながら涙含んだ。

勝彌はお須壽とお喜和の涙を、單に自分に別を惜しんで呉れるので、平素は其ほどは思はなかつたが、存外情の深い人達だと嬉しく、

「長い間御厄介になつて、須壽さんは種々親切に世話してお呉れでしたし、僕は非常に感謝して居るんです。」

お須壽が泣聲を漏さうとして、強て制したらしい氣配に、勝彌は覺えず語を切つた。

お喜和は可哀相だと云はぬばかりにお須壽を見ながら、

「柏木さんの嬢さんは、大層別嬪さんだつて云ひますし、宅の須壽なんぞ比較物にもなら



ないんですけれど、それでも貴方の事だと申すと、一生懸命になりましたね、何時までも貴方のお傍に居る意で居たんですから。」

お須壽の涙を吸る音がする。

「ですから、私だつても、貴方ばかりが頼だと思つてましたのに、」と、お喜和も涙を吸る。

勝彌は煙に巻れて、暫時は何とも云ひ得なかつたが、

「御母さん、僕は柏木の娘が別嬪だから同居するんぢやアない。」と、胸に探ゆく思ひながら、「僕と元二君との便宜から、彼家へ同居する事にしたんぢやアないのだから。」とまでは云つたが、何だか虚言を云つてる様な気がして、乃公は何だつて此様卑劣な意になつたらうと淺間しくなつて、後が云へなくなつた。

「それは左様でせう。ですけれども、須壽は然様だとは思ひませんでね、阿母さんが先般中、彼様に催促を爲たから……久能木さんが困つてらしたのを知つて、催促お爲だから、私まで愛想を盡されたんだつて、先刻から泣いてるんですよ。」と、眼を頻打く。

「須壽さん。」と、勝彌は屹度した語調で、「僕は其様満らん事で感觸を害して、其が爲に轉宿すると思はれては心外だよ。それから、須壽さんに愛想を盡してなんて、其様邪推をされては迷惑だよ。僕は御母さんには厄介を掛けた、須壽さんは能く世話してお呉れたつたツて禮を云つたいらう。僕は事情があつて轉宿するけれども、」

「事情ツて何です。」と、お須壽は顔を背向けたまゝ問ふた。

「……………」

「私に愛想が盡きたからでせう。仰有らないたツて私知ツてよ。」

勝彌は無禮な母子だと思ふ。自分たちが勝手な心算を立て、置いて、其心算が外れたと乃公を怨んで、失敬極つた事を云つて居る。二人の口氣で察するのには、乃公をお須壽の婿にでも爲る氣で、それで母親が寄掛る氣で居たらしい。勝彌が甘んじて下宿屋の婿になると多寡を括つて居たのか。愛想を盡かす盡かさないと云ふ様な語は、如何なる場合に用ゐらるゝものと思つて居るのか、勝彌に對して其様語を用ゐるのは無禮であらうと、既に大喝しやうとしたが、僅かに忍び得て、



「御母さんも須壽さんも邪推は止して貰ひたい……よろしい、邪推されても宜しい。僕はまだ、其を眞面目に辯明するほどの馬鹿ではない意だ。鬼に角今夜轉宿するから、然様思て下さい。」

勝彌は斯う云ふと共に突と立上つて、母子に何を云ふ間もあらせす我部屋へ歸つた。

夕飯は平素の様にお須壽が膳を持つて来て給仕を爲たけれども、臉を泣腫した眼に時々勝彌を睨むばかりで何にも云はない。勝彌も口を利かないで飯を食つて了ふ。お須壽は尙は無言で膳を下げて行つて了つた。

喜んだのは權二で、踊出さなればかり輿に入るのであつた。

勝彌は實は明日の朝轉宿の意で、柏木へも其と約して置いたのであるが、お須壽親子の態度に一刻も此家に在る氣がせぬので、夕飯を済ますと直ぐに俥二輛を頼み來たり、荷物と云つても机に本箱、夜具に中靴一筒と云ふ氣安さだから、忽ちの中に荷造を爲し了り、いや／＼ながら階下の茶の間へ行き、豫て預け置いた金の中から宿料其他を差引き、殘金を返し呉れる様にと云出でたのである。

長火鉢の傍には、例の通りお喜和は炬燵に、お須壽は懷手を爲して徒空然と坐つて居たが、勝彌の申出を聞くと、お喜和はぶつとした顔をして、勝彌をしげ／＼と見て居るのみで、暫時は何にも云はなかつた。

「御母さん、俥が待つてるから、早く爲て貰ひたいですな。」

「ぢやア何ですか、私達が彼様に願つても、如何しても柏木さんへお轉宿なさるんですか。」

「どうです。今更違約する譯には行かんです。」

「貴方も随分情の無い方だね。」

「阿母さん、何を云つてお居でなんだよ。久能木さんは私達を捨て、お了いなさつたんぢやアないかね。其なのに、阿母さんが其様に、何時迄も其様事をお云ひの事は無いは。如何せ愛想を盡かされたんだから、早く勘定を爲てお上げが可いのよ。」

お須壽は勝彌を睨み／＼泣聲で云ふのだ。

勝彌は親子の云ふ事が一々癪に障るけれども、彼等と争つたところで、一入不快の念を嵩



めるばかりだから、一刻も早く去れば可いのだと、態を微笑みながら、

「御母さん、實際陣が、待つてるんだから、何卒早く爲て下さい。」

「阿母さん、早くお爲が可いぢやアないか。お金を預つてるんだから、心を見られる様で可厭ぢやアないかね。」と、お須壽は母へまでも食ツて掛る様な語調だ。

「須壽さん、其様に激しなだつて可いだらう。僕は其様滿らない意思なんぞ持たないよ。」

お須壽は勝彌の語には耳も貸さない體で、又母を促すのだ。

お喜和はぶつ／＼云ひながら帳簿を取出し、お須壽に計算させ領收書を調へさせて、預金と差引した残金を添へて、猫板の上に置き、

「能く御引合を願ひますよ。」と、故に丁寧に會釋まで爲た。

「間違のあらう筈が無いんです。」と、勝彌は領收書に残金をくる／＼と包んで、無難作に袂に入れて、「須壽さんには御禮を爲んぢやアならないんですが……いつれ近日遊びに来た時、」

「い／＼え、お禮なんぞ眞平ですは、其様事を爲て戴く譯が無いんですから。」

勝彌は立上りながら、

「お母さん、長い間御世話でした。須壽さん、四谷の方に来たら遊に來て呉れたまへ。」

「何つても可らんですか。」

「可らぬ。」

「御迷惑の癖に。は／＼は／＼。」と、嘲る様に笑つた。

勝彌は二階から荷物を運卸して俵に積せて、また茶の間を差覗いて、お喜和お須壽に眼を告げた。お須壽は家外まで送つて出て、口惜いとは思ひながらも名残惜く、俵が露路を出て大路へ屈つて了つて、其姿が見えなくなつて迄も尙ほ見送つて居た。

「須さん〜。」

権二は上口へ出て來て呼掛けて、

「未練らしく何時まで見送つてるんだ。早晚飯を復せて遣るから、其様に口惜がらないが可ら。」



「口惜い事なんかありやアしないは。」

お須壽は上口を上る時に小聲で、

「今度柏木さんへ行らッしやる時、私を連れてッて頂戴な。」

「まだ其様事を云つてるのかい。」

「ねえ後生ですから。」

権二がにや／＼笑ひながら首肯くと、お須壽も顔を赧くしながら微笑んだ。

(一一)

勝彌が柏木へ轉宿つて來たのを喜んだのは千代乃と元二で、重勝夫婦は寧ろ可厭な顔を爲たのであるが、其でも表面だけは斜ならず歓迎の様を示して居た。で、美都子は如何かと云ふのに、此は美しい面と無邪氣な眼とが勝彌の心を喜ばしめるのみで、初めて會つた時と些しも異つた様子が見えない。

「明日お入來の様に、元二が申して居ましたから、まだ掃除も出來て居ないで、嚙ぞ御氣味が悪いでせうけれども、お勝手の能い様にお机をお置き下さる様に……美都ちゃん、其御靴を座敷へお運び。元二、お前はお机を……。」と、千代乃が先に立つて、勝彌の荷物を座敷へ運ばせるのだ。

此家には座敷を書齋にするより他に、光線の能く入る室が無いのだ。と、勝彌も云はるゝまゝに、座敷に机書箱なぞの位地を都合よく取つて、文房具を列べなぞ爲し居る處へ、美都子が茶を運んで來て勧めた。

「有難う。」と、勝彌は茶碗を取上げながら、「美都子さん、今後御世話ですね。」

「いゝえ。」とばかりで、其儘立つて茶の間へ行つて了ふ。

勝彌は其後姿を見送りながら、乃公が保證者になつた事を、美都子は既に知つて居るのか。それとも知らぬのか。彼の無邪氣な清しい眼を見ると、如何にも可憐で、何物に替へても充分の保護を與へて、動もすれば悲惨な運命に弄をばれやうとして居る境界から救出さねばならぬ。乃公に果して其だけの力があらうか。いや、其力が有るか無いかは分らん



けれども、能ふだけの努力、それ以上の努力を爲たなら保護し得ぬと云ふ事もあるまい。いや、乃公は屹度保護して見せる。何様艱難とでも、何様迫害とでも、乃公は奮闘に奮闘を續けて、屹度成功して見せねばならぬ。けれども、乃公は不圖した事から、大きな責任を負ふたものだ。林が危んで止めた時、乃公は斷じて却けたけれども、靜かに思ふと或は冒險であつたかも知れんと、自ら危みながらも、萬難を排してもその勇氣が全身に満て居る様にも思はれるのであつた。

元二が菓子器に菓子を盛つたのを持つて来て、

「僕は先生が来て下さつたんで、非常に愉快ですよ。ですが、此様にごたく住んでるんですから、先生は充分御勉強が御出来なさらないだらうと、其がまた心配でならないんですよ。」

「そんな事は無いさ。慣れさへしたら、何處でだつて書けない事は無いさ。」

「さうでせうか。それだと可いですが、併し、」

「まア行つて見た上の事さ。」

二人が話して居ると、格子戸を荒々しく開けた者がある。續いて男の聲で。

「美都子、燈火を見せてお呉れ。」

「はい。」と、美都子が茶の間から燈明を持つて行く様子だ。

勝彌は眉を蹙せて、

「元二君、彼人は何人かね。」

「あれですか。」と、元二は眼に下墨の色を見せながら、「叔父が歸つたんです。」

「あゝ、然様かね、長夫とか云ふ。」

「然様です。」

豫て權二から聞得た、元二等の叔父の馬鹿長なる人が此か。今日まで機會が無くて會はなかつたが、果して權二が云つた様な人物……馬鹿長と罵倒される様な男であるか如何か。逢つた上でなければ分らぬが、此人が此一家の中に何様地位を占めて居るのか。千代乃の味方か、元二の父母方の人か、兎に角逢つて様子を見て置かねばなるまいなぞと、勝彌は考へるのであつた。



「さうかい。久能木さんが来てお居でなんだね。」

長夫は美都子と話しながら茶の間に入った様子だ。

茶の間には千代乃の聲で、

「長夫、お前囃ぞ寒かつたらうね。少時お煖りだつたら、久能木先生に御挨拶をお為なさいよ。」

「煖るのは後にして、久能木君へ逢ふ事に爲ます。」

座敷に入つて来た長夫は、年輩二十六七の、黒綾の背廣に縞の袴、色糸の可厭味なかり胴衣、派手な襟飾には心臟形の針、三寸もあろうと云ふ襟に自由には會釋もなりかぬ體で、美しく髪を別けた頭には香油の匂高く、無趣味な長顔の割合に小さい眼に、何處か人を瞰下す様な調子がある。勝彌は見るから不快を感じながら會釋を返した。

元二は傍で墨下む様な眼を爲て居る。

長夫は勝彌との挨拶を済ますと、元二を見返つて、

「元二、叔父さんの湯呑を持つておいで。」

元二は可厭顔を爲ながら、

「美都子、叔父さんが湯呑が入るさうだよ。」

「はい。」

美都子は長夫の湯呑を盆に載せて持つて來ると、

「美都子お待ち。」と、長夫は兜衣を探つて、小さな紙包を取出し、「お前に買つて來たんだよ。思ふ様なのが無かつたから、好いんぢやないんだよ。」

「難有う。」

美都子は嬉しい顔もせず、紙包を持去らうとしたのを元二が呼止めて、

「美都子、何だい其は。」

「何ですか。私知らないは。」

「ブローチさ。」と、長夫は得意さうだ。

「何だ、ブローチか。」

元二はふんと云はないばかりの顔を爲て、横に向きながら冷笑つた。



勝彌は此叔姪の人々の様子が何となく異様に感はれ、殊に元二が長夫に對する態度に平素から侮蔑して居る意も讀まれるので、成程面倒らしい家庭だと思ひながら、長夫に應接して居ると、茶の間ではお瀧の喋々しい聲が爲出した。

「叔父さんはハイカラだから、買つておいでの物が氣が利いてるよ。お前の今持つてる襟巻だと、ブローチの方から愛想を盡しさうだね。」

「だって、詮方が無いは。」

「早晚乃公が上等の襟巻を買つて來て遣る。」と、云つたのは重勝だ。

「父さんのお云ひの事が當になるもんかね。」

千代乃が斯う云ふと、一同黙つて了ふ。

暫時してからお瀧が、

「早晚何人が買つて下さる人があるかも知れないから、ブローチは其時まで藏つとくさ。」

「叔父さんが買つて來て遣る。」と、長夫が座敷から聲を掛ける。

「私襟巻なんか澤山よ。」

「ぢやア、何が欲しいんだ。」と、長夫がまた聲を掛ける。

「何にも欲しい事は無いは。」

「父さんが買つてお呉れのが當然さ。襟巻位に不自由する筈が無かつたんだに……美都子や、お前が不運なんだよ。」

千代乃がしみじみ何か感ぜたらしい語調で云つたので、忽ちまたひっそりとなつて、小兒の鐵三の乳を飲む音が聞こえるほどだ。

襟巻位は明日にも乃公が買つて遣つても可い。と勝彌は胸の中に呟きながら、それにして、元二等の父が二言目に歴へられて了ふのが氣の毒で、早く話頭が外へ轉れば可いと思つて居ると、鳥渡失禮と長夫は座敷を出て行つた。

「美都子、叔父さんの着物をお出し。」

「早く出してお上げよ。」と千代乃が語を添へる。

唐紙を開ける音が爲たのは、美都子が着物を出して居るのらしい。

勝彌は元二の不快らしい顔を見て微笑みながら、



「叔父さんはなか／＼ハイカラだね。」

「え、金も無い癖に、彼様真似を爲たがるんです。」と、其處からは見えない叔父を睨みもするかの目付を爲て、「ブローチなんて無駄な事なんです。貰つた美都子が喜びもしないのに、なけなしの金で彼様物を買つて、獨で得意がつて、明日の朝は、電車賃を御祖母さんに強請るんだから驚くでせう。」

「真逆。」と、微笑む。

「明日になつて御覧なさい。」と、元二は冷かな笑を含んで、「だから他から馬鹿にされるんです。」

「ぢやア、所謂る見得坊なんだ。」

「それも通過ぎてるんです。」

茶の間では千代乃が、

「長夫、お前御飯は御済なのかい。」

「いえ未だです。美都子、何の副食物だい。」

「お前さんの別を取つてあるよ。美ツちゃん、其處の蠅帳から出してお上げ。」

お瀧の指圖に、美都子が膳立を爲て居る様子であつたが、長夫が不満なさうな口氣で、

「何んだ、鱈の焼冷か。餘り難有くもない。」

「有難く無いか知れないけれど、其でも何だよ、久能木先生とお前さんだけで、元二始め他の物なんだよ。」と、お瀧も些しむツとしたらしい。

勝彌は元二を見ると勃然として拳を握つて居る。

「銀行の辨當の、穴子の附焼は好味かつたつて。母さん、日本橋界限でなくツちやア、食物は駄目ですな。」

「それは然様だともね。」と、千代乃は勝彌が怪しむほど長夫とは合口と見えて、「山の手に廻つて来るお魚なんか、出からして違ふんだから、詮方が無いさね。」

「真箇ですア。此様鱈なんか、下町へ行きあア、犬か猫の副食物だ。」

「犬か猫の副食物だと思ふなら、食べないが可いんだ。」

元二がくわツとして怒鳴り出すと、



「む、食はない。誰が此様、」

「長夫、相手にお成りでない。』と、千代乃は一方を支へて置いて、『元二もお黙り。』

「だって、自分一人別扱に爲て貰つて、其で、」

「元二君、止したまへ。』と、勝彌は手を舉げて制して、『今夜はまだ早いし、其に風も無い様だから、大通を散歩して来よう。一緒に来たまへ。』

「え、お供しますです。けごも、餘りですから。』

「もうい、ぢやないかね。さア来たまへ。』と、元二の腕を確と取りながら、『鳥渡散歩に出て来ます。』

「美都子や、先生の御履物を見てお上げ。』

美都子が見せて呉れた手燭の火光に、勝彌は下駄を穿きながら、

「美都子さん、御土産を持つて来ませうね。』

美都子は諾とも否とも云はないで、唯美しい眼に微笑むた。

勝彌も微笑みながら、

「元二君、君案内して呉れたまへ。門迄の間の足場が、まだ慣れなくツて危険だ。』

「さうですか。では、お先へ。』

元二に續いて勝彌も門まで辿つて、今しも耳門を開けようとした途端に、外からぐわらりと開けたものがある。

「お、吃驚した。』

元二が覺えず聲を出すを、

「あらッ。』と、外でも吃驚いたらしい女の聲で、『何方……御隣の兄さんですか。私も吃驚してよ。』

「僕だッて吃驚した。』

「何處へ行らッしやるの。』

「散歩に行くんです。』

「御散歩なら私も御供したいは。美都子さんも御一緒。』

「いえ、先生の御供をするんです。』



「えッ、先生ですッて。」

娘は始めて元二の他に人ありと知つたので、俄に語調が變つて、

「御邪魔さま。」と、尙ほ門外に在ながら身を避けた。

「先生、お出なさつちや如何です。」

「女の人から入つて貰はうぢやないかね。」

「いゝえ、私はお後で能う御在ますの。」

「では失敬します。」

勝彌は耳門を出ると直ぐに石階を下りる。續いて元二が下りると、娘は内に入つたのか、耳門を閉める音がした。

勝彌と元二は四谷の大通の方へと歩を移しながら、

「元二君、今のは隣家の娘かね。」

「おうです。」

「美都子さんの友達だと見えるね。學校へ行つてるかね。」

「おうです。」

「美都子さんも早く學校へ遣りたいもんだね。君でさへ學校へ行かないで居る境遇だから、止むを得ないとは云ふものゝ、小學の教育を受けたいだけでは、今後の婦人は駄目だ。此四月の學年の代目から、是非學校へ遣る事にしたかね。尤も、入學試験があらうから、其準備は君と僕と二人で監督して、出来るだけ修めさせようぢやアないかね。」

「おうです。」

「學費は、僕が何とか工夫するから、是非學校へ遣る事に爲よう。」

「さう爲て戴けば、實に美都子の幸福です。」

話頭は元二の父から長夫の上へと移つた。

元二の云ふ所に依ると、柏木家の財産は二つに分けられて、重勝は本家、長夫は別家として其日に追はれないで済むほどの資産はあつたのである。然るに重勝とお瀧とが商業に手を出て、其財産を失つたところから、當時千代乃と美都子——千代乃が鍾愛き餘り手放さなかつたので——との二人と別家して居た長夫の財産を流用して、これをも今日の有様



に陥れて了つた。其も重勝夫婦が無断で流用したのではなく、當時長夫は尙ほ私立の商業学校へ通つて居た位だから、千代乃へ泣付くして、今度は大丈夫失敗する様な事はありませぬ。屹度充分の利子を附けて返す事にしますと云ふ様な事を云つて、幾度と云ふ事なしに流用した結果が、終に長夫の財産までも全然失ふ事になつた。で、兩家を一家に約めて、三年程前から今の生活に入つたと云ふのである。

勝彌は此で重勝長夫等の關係を知つたのである。此外にも尙ほ雜入つた事情があらうけれども、其は重ねて聞くとして、差當つて更めねばならないのは、元二等が父に對する態度である。一家の主人たる者が主人として立てられて居らない以上、其家の治まつて行かう道理が無い。それには、千代乃と云ふ重勝に取つては餘儀ない尊長があるけれども、此は此で何とか工風があらうから、兎に角元二から父に對する態度を更めさせねばならぬ。長夫と重勝との感情を融和げるも大難事ではあるけれども、此も千代乃とお瀧を説いたら、何とか好い手段が無いとも限らぬなと考へながら、

「元二君、僕は君の御父さんの境遇に、第一同情す可きだと思ふが、如何かね。」

「親父は駄目です。」と、元二は言下に答へた。

「何故駄目なんだ。」

「僕の家が、今日見たいな困難に陥つたのも、今お話した様に、親父が満らない事に手を出したからなんです。親父は人に欺され易くつて駄目です。彼の長谷なんて男から何時も欺されて、氣が付かないんですからねえ。親父にもツと着實な意志があつたら、今日の境遇にはならなかつたんです。親父は駄目です。宅では誰一人、親父を信用してゐるものは無いんです。」

「君が其様事を云ふのは間違つてゐるんだ。」

「え、さうですか。」と、元二は前方から疾驅し來た電車の火光で勝彌の顔色を窺つた。

「君が其様事を云ふ事があるものか。他の人が御父さんを信用せんでも、君は子として親に對する尊敬の道を盡さんやアならない。御父さんが商業で失敗されたのも、失敗しやうと思つて商業に手を出されたんぢやアないだらう。寢て居て資産を食耗すよりか、何か儲ける道を講じたいと云ふ所から、つい商業に手を出して、其手違が圖らず失敗を招く事に



なつたんだらう。云はり、子孫の爲に財産を殖さうと計つて失敗されたんだから。君が其を怨んで、親父は駄目だなんてことを云ふのは、僕に云はせると實に怪からん話なんだ。御父さんを責めるなら、御母さんも共に責めんきやアなるまい。僕の見る所では、御父さんよりか御母さんの方が、」

「母もいかんです。」と、元二はまた言下に答へた。

「それだと、御父さんの罪ばかりではないだらう。」

「さうです。半分は母の罪なんです。」

「僕は半分以上、御母さんの罪ではないかと思ふんだ。」と、勝彌は歩を止めて、何を探すのか彼方此方の店を見廻しながら又歩出して、「元二君、君の御父さんは好人物だから——御人好と云ふ意味ぢやないから、誤解しちや不可よ——今日迄の失敗にしても、傍から御母さんが注意されたら、幾度も繰返さなくも済だらうと思ふのだ。況して、御祖母さんには全然頭が上らない様だから、長夫君の財産に手を着られた事にしても、御父さんよりか御母さんが主になつて、御祖母さんを説かれたんぢやないかと、僕には思はれるんだよ。」

「さうです。それは然様です。御祖母さんを説いたのは、無論母だつたんです。」

「それ見たまへ。その場合に御母さんが、御父さんを止めくして行かれたら、御父さんが長夫君の財産には手が着けられなかつたらうと思ふんだ。其點から論じて行くと、御祖母さんにしても、多少の罪が無いとは云へなからうと思ふ。」

「或はさうかも知れないです。」と、元二の返辭は稍と澁つた。

「それならば、御父さんばかり虐められて、何も今日の有様で居られる事は無からうと思ふね。子からまで侮蔑されて、信用するに足らん、意氣地が無いのと云はれて居られる君の御父さんは、實に悲惨だ。君、親が子から侮蔑されてるほど、親の身に取つて悲惨な事があると思ふかね。それを、君は子として行ひ、御父さんは親として受けて居られるんだ。元二君、君は僕の云つた事を何と思ふかね。意見があるなら聞くから、遠慮しないで言つて見たまへ。」

勝彌の見脈が宛然叱りもするかと思はれたので、元二は言句も出し得ない。

「元二君、意見があるなら、聞かうぢやないかね。」



「いえ、僕が悪かつたんです。」と、元二は頭を掻いて居る。

「悪いと思つたら、明日から態度を改めたまへ。僕が親に孝を盡せと云ふのを、久能木が村夫子でも氣取つてる様に思つて、君は或は苦笑するかも知れんけれども、」

「いえ、其様事はありません。」

「どうでなければ、御父さんに對する態度を明日から改めたまへ。」と、云ひながら、勝彌は嘲ける様な笑を浮めて、「僕の友人などに、此様事は云はうもんなら、久能木は今の若さに忠孝など論じて何にする意か。だから思想が古の、新時代の思潮に後れてると云つて嘲けるさ。嘲ける奴には嘲けらして置くまで、僕には僕の取るところの主義がある……元二君、僕は疾に兩親を失なつたから、別して君のお父さんに同情するのもかも知れないが、兎に角君は羨むべき人だ。君には兩親がお在の上にお祖母さんまで丈夫で居られる。僕の父と母とは殆んど月を同うして病死された……さうだ、三年前の事なんだ。父方の祖父母は、僕の母が生れる前に死なれたと云ふし、母方の祖父母は、僕の六七歳の時分まで生きて居られたから、僕は顔だけは臆げに覺えて居る。元二君、君は僕に比べると、實に幸福なんだ

から、御父さんや御母さんを大切に爲る事を、忘れちゃア不可んよ。御祖母さんは君を愛してお居での様だから、君が御父さんとの間に立つて調和を計つたら、圓滑に行かん事は無からうと思ふ。僕も及ばずながら盡力するから、君も誠心誠意を以つて調停を計りたまへ。君の一家の主人たるべき人に權威がなくなつて、君の家が治るものかね。君、君の一家の爲なんだよ。い、かい君、屹度明日から實行して呉れたまへよ。」

勝彌がしみくこの意見に、元二も痛く感じたのか疊聲になつて、

「僕が實に悪かつたんです。先生の今夜の御意見は、屹度服膺します。」

「どう云つて呉れると、僕は非常に愉快だ。君、君と僕と協力すれば必ず成功するよ。お

お彼店に有る様だ。元二君、線路を向へ越えるんだよ。」

勝彌は前に立つて電車の線路を越えて、電燈の光輝眩き洋物店へと入つた。

勝彌は其店にて婦人用の襟巻を買求め、尙ほ四谷見附近くまで散歩なし、船町の柏木に歸つて來たのは、十一時近い頃であつた。

千代乃を始め重勝長夫、美都子も既に寝に就き、お瀧が一人起きて居た。



座敷には、勝彌の机の上に洋燈が細目に貼られ、臥床が二つ馳べて敷いてあるのは、勝彌と元二の爲の設けらしい。

「唯今歸りました。」

勝彌は茶の間を差覗きながら云ふと、お瀧は見返り、

「お歸りなさい。御手紙が参つてますよ。」

「僕にですか。」

「お机の上へ上げて置きました。」

勝彌は机の前に坐つて、置いてある端書を見ると、至急に御相談したい用事が出来たから、明日午前の中に来訪を乞ひたいと云ふ文意で、太田紫瘦が勝彌が尙ほ飯田町の山田に在るものとして投函たのを、お須壽が附箋して廻して寄越したのだ。

「至急に相談したいって何様用だらう。」と、勝彌は考へながら、「元二君、君は僕よりも朝起の様だから、君が覺きたら直ぐ覺して呉れたまへよ。」

「はい、何時頃ですか。」

「さう……八時前なら尙ほ可いね。」

「八時前ですか。」

茶の間からお瀧が、

「元二にお頼みなさつたつて駄目ですよ。其人は、十時より早く起されないので、私から私に上げて上げますよ。」

「では、願つて置きます。僕は容易に眼が覺めないんですから、其意で願ひますよ。」

「承知しました。」

勝彌は小聲になつて、

「君は毎朝、十時まで寝てるのかい。僕も朝寝坊だから、君に小言は云へんけれども、明朝を第一日として、大いに早起を爲ようぢやアないかね。」

「えい。」と、元二は生返辭だ。

「其人は駄目ですよ。」と、茶の間に聞こえたか、お瀧はまた斯う云つて、「其人は腦が悪いもんですから、早起をお爲ですと、終日氣分が不良いてお云ひですし、無理に起さない



事に爲て居るんですよ。」

「ちよどですか。」

勝彌は唯斯う云つて暫時考へて居たが、

「元二君、朝寝を爲たからつて、腦が治るもんぢやアないよ。夜は早く寝て、朝は早く起きて運動するのが、腦の悪いのには一番好いんだよ。朝早く起きられないなんて云のは、つまり習慣なんだ——悪習慣なんだ。僕にも此悪習慣があるんだから、之を機會に大に奮發して、矯正したいと思ふんだよ。君も然様したまへ。二人で互に相戒めて矯正したら、譯なく習慣を換へる事が出来ようと思ふんだ。さうして、大いに勉強しようぢやアないかね。君も僕も大いなる責任を有つてるんだから、大いに勉強せんきやアならない。それには、如何しても先づ、悪い習慣から破つて行かんきやアならない。君、何を爲るにしても努力せんければ不可よ。先刻途中で話した事も、君に今後實行して貰はんきやアならないし……其事と、朝寝の悪習慣を破る事は、是非明日から實行して呉れたまへ。僕も必ず實行するよ。君、可いかね。」

「えへ。」

「其様生返辭でなく、誓ふと云つて呉れたまへ。」

「はい、誓ひます。」と、元二もはきとした語調で答へた。

「難有う。では、早く寝ようぢやアないかね。」

勝彌は元二と枕を駢べて寝に就き、柏木一家の人々の事や、自分の亡き父母の事、明日紫瘦に會ふ事などを考へてる中に、何時か睡に落ちたのであつた。

(一三)

「先生八時ですよ。先生、先生。」

元二も今起きて、僅かに着物を着たばかりで、頻りに勝彌を揺起した。

「あゝ起きよる、今起きよる。」

勝彌が辛らうに眼を開くと、元二も尙ほ睡むさうな眼に笑を含みながら、



「先生、今朝を第一日として、早起を爲さる約束ですせ。」

「お、然様だつた。よし、起きる。」

勝彌は始めて屹度眼を開いて見ると、元二の臥床を美都子が片付けて居るのである。

「美都子、兄さんが手水を使ふから、湯を取つてお呉れ。」

「臥床を上げてからで可いでせう。」

「あ。」

勝彌は起上りながら、

「元二君、君は湯で顔を洗ふのかね。」

「え。」

「いかな。水に爲たまへ。」

「水にですか。」

「冷たいと云ふのかね。」

「冷たくない事ありませんね。おまけに水道を來てるんですからね。」

「水道の水だから冷たいッて。」と、勝彌は寝衣を着替へて、臥床を疊みながら、「青年が湯で顔を洗ふ様な事ぢや不可んね。僕は子供の時分から、湯で顔を洗つた事は無いよ。」

「さうですか。」と、元二は困つた顔を爲て居る。兄の夜具を茶の間の押入れへ運んで來た美都子は、勝彌が夜具を疊んで居るのを見るより、

「私が疊みますから。」

「いえ、僕が疊むから可いです。元二君、自分の事は自分で爲なきやア不可い。君も明朝から自分で夜具を疊むが可いよ……美都子さん、夜具は何處へ藏ふんですか。」

「彼方へ。」

「いえ、僕が運ぶです。」

勝彌が敷蒲團を抱卷を一抱にすると、美都子は掛蒲團を抱えて先に立つて茶の間へ行く。勝彌が其後へ續くと、千代乃は見るより、

「其處へお置が能う御座んすよ。」



「いえ。」

勝彌は美都子と入替つて夜具を押入へ納れると、美都子が急いで枕を持って来て、また入替つて其を藏ふ。

勝彌は座敷にほんやりして居る元二に向ひ、

「僕と一緒に顔を洗ひに行きたまへ。」

「え。」

勝彌は楊枝を咬へて前に立つ。

「僕も今行きます。美都子、先生に手水を取つてお上げ。」

「取つて下さらんでも、銅盥を貸して下されば可いんです。」

「今取つて参りますから。」

「なに、臺所で自分で取るから可いんです。」

勝彌は美都子に續いて臺所へ行くと、元二は尙ほ茶の間に残りながら、火鉢に手を暖まして、

「弱つちやツた。水で顔を洗へッて云ふんだもの。」

千代乃は首肯しながら、

「お前の御祖父さんも、曾祖父さんも湯で顔を御洗ひなされた事はありませんでしたよ。」

お前のお父さんだつて、御祖父さんが居らッしやる時分は、水で顔を御洗ひだつたよ。」

「だつて、まだ二月だし、手水鉢に氷が張つてる事が多いんだに……弱つちやつたな

ア。」

美都子が臺所から歸つて来て、

「兄さん、先生がいらッしやいて。」

「先生は水で顔を洗つて居るんかい。」

「ええ。」

「おや。」

元二は頭を掻き、澁々に行つて見ると、丁度勝彌が顔を洗つて了つたところだ。

元二は勝彌が直ぐ座敷へ行つて了ふ事と思つて、熊と躊躇して居ると、



「元二君、後で頸を此様に拭くとね、感冒に罹らんと云ふし、」と、勝彌は手拭で頻りに頸を拭ひながら、「また非常に心地が可いよ。」

「さうですか。」「と、悠々と楊枝を使つて居る。

「元二、湯があるんだよ。」と、傍に蒔蓑草の茹でたのを洗つて居たお瀧が見返りながら、「取つて上げようか。」

「なに可いんだ、今日から水で顔を洗ふんだから。」

「お前がかい。」「と、呆れた顔を爲して、「柄にない事を爲して、風邪を御感さでないよ。」

元二は何にも云はないで、水道の水を銅盥に受けて居る。御母さんが此だから、一層情弱になるんだ、困つたものだと思ひながら勝彌は黙つて見て居る。

冷たさうだなアと云ひたさうに、元二は凝乎と銅盥を見て居る。

「元二、湯を入れて上げよう。」

お瀧が釜から柄杓に一杯湯を汲んで、銅盥へさアツと注げる。

「御母さん不可いよ、其様事を爲さやア。」「と云ふ中に、また一杯入れた。

「困ッ丁ふちやアないか、御母さん。」「と、母の顔を凝乎と見上げて、「今日から水で洗ふ事に、先生と約束したんだよ。」

「まア然様なのかい。」「と、可愛相にと云はないばかりに元二を見て、「お前は生れ落るとさから、今日まで、水なんかで洗つた事はないんだからねえ。」

「だつて、今日から改めるんぢやアないか。」

元二は銅盥の縁に手を掛けて明けようとする。

「元二君、今朝まで其で洗つて置く。」

勝彌は母が此では駄目だと思ひながら、茶の間へ來ると、美都子が座敷に拂塵を掛けたつて掃いて居るところだ。

「先生、御煖りなさい。」

千代乃が勧めるまゝ、勝彌は火鉢に手を懸しながら、

「御父さんは既う御出掛けでしたか。」

「早くお出掛の様ですよ。」



「長夫君もですね。」

「彼は九時までに、銀行へ出勤しなまやアならないんですよ。」

「御父さんや、長夫君に對しても面目ないですな。」と、微笑む。

千代乃も微笑むで、

「長夫は職務があるんですから詮方がありませんけれど、貴方は何も強て、」

「いえ、さうでないです。朝早く起きて讀書するなり、何か書くなりして、大いに勉強しなまやアなりません。僕も下宿に居た昨日迄とは違ふのです。」

勝彌は千代乃が注いで呉れた茶を禮を云つて一口飲んだところへ、臺所から元二が顔を洗つて來た。

「元二君、如何だったかね。」

元二はきまりが悪さうに微笑む。

座敷の掃除を済まして、美都子が拂塵と箒を持って入つて來る。勝彌は見返つて、

「美都子さん、御苦勞でしたね。」

「いゝえ。」と、美都子は拂塵と箒を持ったまゝ、臺所へ行つて了ふ。

「元二、火を持つてお行で。」

千代乃が臺十能に火鉢の火を取つて居るのを見ると、勝彌は座敷へ行き、机の前に座つたが、昨日とは違つて何となく心地が快い様だ。

元二が火を持つて來て、火鉢へ入れる傍から、

「如何だったかね。明朝は奮發して、水ばかりで洗ふんだよ。」

「あれだから母には困るんです。」

「御母さんばかりが悪くもない様だね。」と、高々と笑ふ。

元二も垂頭いたまゝ、笑ひながら、火を移して了ふと、

「富士見町まで行つて來たいから、美都子さんに頼んで、飯を急いで貰つて呉れたまへ。」

「さうですか。」と、元二は茶の間へ行つた。

勝彌は美都子が運んで來た朝飯の膳に元二に相對して、聽て飯を済ますと、直ぐに帽子を手にして、



「元二君、少時休んでから、昨日の夜を淨書して置いて呉たまへ……なに、午前の中に歸つて来る意だ。」

「どうですか。お早く。」

行ッてらッしやい。お早くお歸りなさいませとの語を、千代乃お瀧等に浴せられて、勝彌が支關へ行くと、其處には元二と美都子が見送にとて待つて居る。

「美都子さん、一々送らなくッても可いんですよ。元二君、では行つて来るよ。」

勝彌は格子戸を出ようとしたが、不圖思出した事があるので立止つて、

「元二君、すつかり忘れて居た。」

「え、何をですか。」

「そら、昨夜買つて来た物があつたらう。たしか、床の間に置いた筈だ。彼をね、美都子さんへ呈びて呉れたまへ、今朝直ぐに呈びる意で居て、つい忘れて居たんだ。」

「どうですか。有難う。美都子お禮をお云ひ。お前には上等過らう。」

「其様事は無いさ。美都子さん、粗末なんですよ。」

美都子は床の上に紙包の置いてあつた事は、先刻掃除を爲した時に見て知つて居るけれども、それが何であるかは知らねど、兄の命の儘に叩頭を爲した。

「禮をお云ひなさる程の物ぢやないんです。では、行つて來ます。」

勝彌が格子戸を外へ出ると、あつと云ふ女の聲が近く聞こえて、續いて聞こえたのは「違つてよ。」と二人ほどの女が一緒に云つた語だ。勝彌が驚きながら見返ると、隣家の格子戸の前に、學校へ行掛らしい女學生の、何れも十七八の廂髪が三人佇立んで居たので、

勝彌が見返つた時、申合せた様にくるりと背を見せて、中にはくすく笑つたのもあつた。「何が違つたと云ふのだ。」

勝彌は斯く吐きながら二三歩あゆんで又振り返ると、三人等しく見送つて居たのが、またくるりと背を見せた。

「彼様手合が紫瘦等の小説の好材料なんだ。肉的文學の材料ともなり、其愛讀者ともなる奴等だ……元二を花と慕ひ集る蝶なんだな。蝶と見れば美しい聯想も起るけれど、あつと違つてよとは何だ。鐵面皮いと云はうか、小生意氣なと云はうか。彼様語を口へ出して耻



ぢないとは呆れざるを得ない。紫瘦等に見せたい位なものだ。」

勝彌は此く呟くとベツと唾を吐いて、門の耳門を破よと開け破よと閉めて、大通の方へと疾歩いだ。

美都子は耳門の閉まつた音を聞いてから障子を閉めて、座敷へ行つて見ると、元二は紙包を解いて襟巻を取出したところだ。

「美都子、お見。實に住いだらう。」

「あらッ。」と、美都子は嬉しさに覺えず頬笑ひた。

美都子に相應しい色氣の、而も最新流行の形で、かねて欲しいくと思つて居たのである。

「御祖母さまや母さまへ見せておいで。」

「御祖母さま。」

とばかりで、千代乃の前に出して見せる。

「先生がかい。」

「えへ。」

「大事にお爲よ。」

「母さんへお見せ。」と、お瀧は手に取つて見て、「眞箇好いんだね。美ッちゃん、母さんに禮をお云ひよ。」

「あら如何して。」と、美都子は何故かと呆れて眼を丸くする。

「私が昨夜かまを掛けといたから、直ぐ買つて貰へたんだよ。」

「あら然様なの。可厭な母様ねえ。私さまよりが悪いから御返しよ。」と、涙合ひ。

「母さん、」と、元二は躍起となつて、「其は本統ですか。」

「なアに戯言なんだよ。美都ちゃんを一寸調戲つて見たのさ。」と、お瀧は態と高聲に笑ひながら、「元二、お前まで本氣におなりの事はないぢやアないかね……美都ちゃんや、母さんは裏で洗濯してるから、鐵ちやんを氣を付けてお呉れよ。」

お瀧は茶の間の隅に寝かしてある鐵三の様子を一寸見て、臺所へ出て行つた。

元二は太息を吐いて、



「御祖母さま、母さまは如何して如彼なでせうね。」

「本當にさねえ。」と、千代乃も太息を吐く。

美都子は怨めしうに襟巻を見て居た。

(一四)

勝彌が蛙原の紫瘦の家を訪うたのは九時過ぎてからの事で、取次に出て来たのは小川水鏡である。

水鏡は勝彌を見るより早くも笑掛けて、

「久能木先生、何卒御通下さい。」

勝彌は可厭な奴だと思ひながら、

「紫瘦君は在宅でせうな。」

「はい、お在宅です。」

「では。」

勝彌が座敷へ通ると、紫瘦は今起きたばかりらしく、縁側に立つて楊枝を使つて居たところだ。

「久能木君、如何したんだ。べらぼうに早く来たもんだね。君の事だから、今時分はまだ眼も覺めなからうと思つてたんだ、早く来たもんだね。」

勝彌は笑ひながら、

「手紙だつたから、急ぎの用事ぢやアないかと思つて早く来たのさ。」

「それは難有う。なに其様に急ぐ事でも無かつたんだ。一寸待つて呉れたまへ、顔を洗つて了ふから。小川君、久能木君へ火鉢を上げて呉れたまへ。」

「はい。」

水鏡は茶の間へ行つて、懸て火鉢を抱へて来て勝彌に進め、

「今朝はまた御寒い様ですね。」

「さうかね。」と、いかにも素氣ない。



水鏡は何か勝彌の機嫌を取つて、其歡心を得ようと思ふけれども、其様子が餘り冷淡なので取附端がない、

下女のお玉が銅盥に満々と湯を入れて、切戸から庭へ入つて来て縁側に置いて、直ぐ出て行つた。

紫瘦も水で顔を洗へない組だなど、勝彌は元二の事を思出して覺えず微笑んだ。水鏡は直ぐ附入つて、

「先生、何か面白い御趣向でもお浮びなんでしょうか。」

「いや。」とばかりで、見向きもしない。

茶の間で、紫瘦の妻の都根子がお玉へ何か云つて居る聲がした様であつたが、唐紙の開いたので勝彌が見返ると、都根子が自身茶碗を捧げて入つて来て、嬉しいやうな笑顔を見せながら、

「久能木さん、能く入らしつて下さいましたこと。粗茶で御在りますよ。」

「いえ。」と、茶碗を受けて、「御無沙汰しました。」

「如何致しまして。」と、水鏡を見返り、「小川さん、火鉢の傍に御菓子を出して置いたから、持つて来て頂戴。」

「はい。」と、小川は茶の間へ行く。

「久能木さん、御下宿を御替へなさいますッてね。」

「如何して御存知ですか。」

「小川さんが聞いて来たと申して居ますのよ。」

「さうですか。實は既に昨夜轉宿したんです。」

「おや、昨夜もう御轉宿りなさいましたッて。」

「それは其筈なんだ。」と、紫瘦が顔を拭く縁側から入つて來ながら、

「美人の娘さんが在るッて云ふんだもの、蒼川君だつて猶豫してる場合ぢやないさ。ねえ、蒼川君。」

勝彌は唯微笑んだ。

「奥さん、非常な美人ださうですよ。」と、水鏡が菓子器を持つて来て、勝彌に進めながら



斯う云つた。

「小川、君は如何して其様事を云ふのか。」

勝彌が屹度水鏡を見ると、水鏡はにや／＼笑ひながら、

「兒玉君が非常に憤慨して、僕へ話したんです。」

「兒玉ッて……あ、彼の男か。君は彼男を知つてるのか。」

「舊い友人です。」

「さうか。成程、君の友人として差しからん人の様だ。」と、勝彌は冷笑つた。

紫瘦は勝彌と火鉢を隔て、坐つて、「私にも茶を持って来てお呉れ。」

都根子は茶の間へ行く。

「僕は兒玉と云ふ人に逢つた事が無いから、何様人物か知らないが、兎に角大いに憤慨して居たさうだよ。」

「何を憤慨してるのか知らないが、其が何も僕に關係を有つて居よう筈は無いんだし、」

「いゝえ、大いに關係があるんですよ。」と、水鏡がまたにや／＼笑ふ。

「何故なんだ。」

「何故と云つて、久能木先生、貴方が餘り艶福に富んでお居でだからですよ。」

「馬鹿な。」

「いや、然様で無いさうだよ。」と、紫瘦がにこ／＼しながら語を挿して、「第一 彼山田の娘が、非常に君に戀して居たと云ふぢやアないか。其が兒玉の癪に障つて居たらしいんだ。」

勝彌は苦笑を爲し、

「假に其様事があつたにしても、それは僕の知らん事なのだ。」

「君は知らんにしてもさ、娘が戀して居たのは事實なんだらう。」

「僕は知らない。」

「知らんと云ふのは可笑いね。」

「其様事はありませんでせう。」と、水鏡は調戲もするかの語調で、「女が戀してりや様子が違ひませア。久能木先生が其を御存じないなんて、えへ、信じられんですな。」

勝彌は憤然として、



「信じられんとは誰に云ふ語か。」

「えッ。ど、水鏡は覺えず逡巡する。」

「貴様見た様な愚劣な男が、乃公の前に出て、兎や角云ふのからして第一間違つてゐるんだ。貴様は何だ。自ら省るが可い。臆面も無く能く婦人に關した談話が出来るな。貴様が乃公に對つて信じられんとは、何だ。失敬な奴だ。彼方へ行けッ。」

勝彌の見脈が餘り烈しかつたので、水鏡は氣を吞まれて何とも云ひ得ない。

「紫瘦君、僕に用があると云ふのは此様事かね。」と、紫瘦の顔を睨む様に見える。

「さうぢやないさ。今のは餘談なんだよ。戲言なんだからね、君怒つて呉れちや困るよ。」

「餘談にしろ戲言にしろ、君まで一緒になつて満らん事を云ふにも及ぶまい。失敬だが、君の品性を疑ひたくなるね。」

「さう眞面目になられちやア恐縮したね。」と紫瘦は苦笑をする。

其處に都根子が新規に茶を入れて持つて出て、

「彼處で聞いてたんですが、所天も久能木さんの御氣象を知つてらッしやる癖に、何です

ねえ、小川さんと同じになつて。」と、久能木へ茶を進める。

「難有う。」と、彌勝は茶を一口飲んで、「紫瘦君、僕へ相談があると云ふのは何だよ。」

紫瘦は勝彌を見て躊躇ひながら、

「實は君の原稿を欲しいと云ふ者があるんだが、書いて呉れる事が出来ようかね。」

「それは書いても可いさ。だが、欲しいと云ふ其人は何人なのかね。」

「實は君も知つてる〇〇社なんだ。」

「ぢやア、彼社の雑誌に掲せよう云ふんだね。」と、眉に幽かな皺が見える。

「さうなんだ。」

「さア。」と、暫時考へて居たが、「僕には、君見たいな小説は書けないからなア。」

「僕の小説見たいなもの。」と、紫瘦は可厭な顔を爲たが、忽ち微笑むで、「それは無論さ。

君には君の本領があるんだからね。」

「無條件なら書いても可いが、それでなきやア御断りだ。」

「無論條件なんぞありやせんよ。」



「それならば書いても可らぬ。」

「併し……。」と云つて紫瘦は躊躇つた。

「併しと云ふのは、無條件では不可い、青年男女に歓迎されさうな肉物的の物を書けと云ふんだらう。君さうなんだらう、社の方の希望は。」と、勝彌は微笑みながら、見るともなく都根子に顔を見合せて。

都根子は眉を顰せて、

「可厭で御在ますのね、頃日歓迎されるとか申します小説は。」

「解もしないで何を云ふ。」と、紫瘦が冷笑ふ。

「解らないのかも知れませんが、高潔か卑醜か位は、感じの上からだって、」

「お前なぞが口を出すところぢやアない。黙つてるが可い。」と、紫瘦は目顔でも都根子を制して、「蒼川君、強てと云ふんぢやアないから、兎に角起稿して呉る事は出来るだらうね。報酬の方も、君を満足させる事は出来んかも知れないが、相當の事はさせる意だよ。」

「兎も角も書いて見る事に爲よう。僕も今後は、多少支出が餘計になるだらうと思ふから、

大いに稼がんけりやならんので、報酬の方も餘分に貰ひたくは無いが、月末には入手する様に計らつて呉れたまへ。」

「それは僕が受合ふよ。編輯の締切が迫つてるさうで、一週間ばかりの内に願ひたいと云つたが、出来るだらうね。」

「出来ないまでも、大いに奮つて書いて見よう。」

「ぢやア、頼むよ。」

用談が済んだので、勝彌が眼を告げようとする氣勢を、紫瘦は早くも見て取つて、

「君、まだ種々聞きたい事もあるし、まア寛話して呉れたまへ。」

都根子も傍から、

「久振に入來しつたんですから、何卒御緩り御話しなさいましな。今度の御下宿は……お下宿と云ふんでも無い様に伺つてますが、多少か此迄よりか御心持がお違ひなさいませうね。」

「大に違ふですな。私も下宿の意でないし、彼方でも其意でない様ですから、何となく居



心地が可です。』

「それは然様で居らっしゃいませうね。其御宅は何を爲すって居らっしゃるんで御在ますか。』

「まア無職ですな。一人銀行へ務めて居る者がある様ですが。』

勝彌は柏木一家に就いて其大要を物語つて、

「……随分面倒らしい家庭の様ですが、家庭の趣味を研究したい希望も有るんですから、當分同居する事に爲て見たのです。』

「随分大勢さんで居らっしゃいますのね。』

「さうです。』

「其娘と云ふのは、君、洋行して来た學士でなきやア嫁らんと云つてるさうだね。眞個さうなのかね。』と、紫瘦が問ふた語調が何か意味ありさうに聞こえた。

「如何だか。僕は知らない。』と、勝彌は態と斯う答へた。

「兒玉が其様云つたとか云ふんだよ。小川君、さうだね。』

水鏡は前の勝彌の見脈に恐れて、今まで何も云はないで居たが、俄かに元氣づいて膝を進めて、

「さうです。僕が思ふのには——無論推察ですけれども——兒玉君が娘さんを貰はうと爲たらしいんですね。すると御祖母さんとかい謝絶する時に、洋行した學士でなきや嫁りません、貴方でも洋行なさつて、立派になつて居らっしゃれば——それも其時の都合ですけれども——上げない事はありませんと云た様な事を云つたらしいんです。兒玉君の口氣から推測を下すと、さうらしいんですよ。ところがですね、今度久能木先生が同居なさる事に極つてから、兒玉君が行つて見ると、其御祖母さんが非常に久能木先生を褒めたんださうです。其褒め方が尋常でないんで、兒玉君が非常に憤慨して居るんですよ。其娘さんを、久能木先生に占められさうだと云ふんで、躍起になつて居るんですよ。へへへ。』

水鏡が異な笑方を爲たので、勝彌はまた不快を感じて、凝乎と水鏡を睨んだ。

水鏡は勝彌の様子に、また怒に觸れたとかきよツとして、

「久能木先生、それは僕が云のでは無いんですせ。兒玉君が云つたのを、取次いだ迄な



んですから、怒つて下さつちや困るですよ。」

勝彌は苦笑を爲ながら、

「兒玉と云ふ男は、思つたより恐物だね。奪ふの奪れるのと云ふところを見ると、柏木の娘を、自分の所有物か何その様に思つてるんだね。」

「如何か知らないですが、尙だ未練があるからなんせう。」

「満らん男があつたものだね。」と、勝彌は笑出した。

都根子は微笑みながら、

「世間には、其様人がありますんせうね。其様人は、女を何だと思つてますでせうね。」

「さうですなア。」と、勝彌は水鏡を見返つて、「君には解つてるだらう。奥さんにお答へしちや如何かねえ。」

「え。」と、流石に鼻白んで、「僕は御免被りませう。」

「小川さんにも似合ないは。玉へ、能く何か講釋お爲ださうですは。」

「奥さん、満らん事を仰有つちや困るですよ。僕がお玉ごんなんかへ。」

「だって、玉が然様云つてるは。何なら玉を呼んでも可いは。」

「其様満らない事を爲さつちや困るですよ。何も僕が講釋を爲たの何のツて、其様事は其りやア其の、そりやお玉ごんが何か間違へて居て、」

「だから、お玉を呼べば分つてよ。」

「其々其様。ごい如何も困るですな。奥さん、満らん事でお調戲ひなさつちや、久能木先生に對しても、へへへ、實に閉口するですよ。」と、頻りに頭を掻いて居る。

勝彌もつい座輿に乗つて、

「お玉と云ふのは、女中でしたな。面白から呼んで下さい。」

「久能木先生迄もお人が悪いですよ。十字火に陥つちや、退却の外策なしだ。や退却く。」

水鏡が敗亡の體で玄關へ駆込んだので、後は三人の大笑となつた。

「成程、兒玉とは好一對だ。」

勝彌が笑ふと、都根子は眉を顰せて、

「女中なんぞを調戲つて面白がつてる人が、何になれますでせうね。宅ではデカタンとか



で可いッて申しますけども、私なんぞは實に可厭だと思ひますのよ。」

「彼男がデカタンですッて。」

勝彌の眼には冷かな笑が浮ぶ。

「また始めたね。小川が下女に調戲うから可いッて、何時云つた事がある。彼は彼で放擲とけば可いんだ。それよりも、私は蒼川君に注意したい事があるんだよ。」と、紫瘦は笑を帯びながら勝彌を見る。

「僕に注意したい事があるッて。謹んで承まはらう。」

「君が柏木へ轉居つたのは、君に取つては一大事と思ふんだがね。」

「如何云ふ意味でかね。」と、勝彌は何となく胸が騒ぐ。

「君と柏木の娘さんの、今後の關係に就いてなんだよ。」

「關係と云ふと。」と、眼が輝く。

「君の氣象だから、君から如何と云ふ事はあるまいがね。」と、語を断つて相手の顔を凝眸と見て、「娘さんが君に戀した時にはだね、何様結果に到らうかと思ふと、杞憂に勝へないん

だが、」と、また勝彌の顔を見る。

「僕の意に合つた性質だつたら、結婚する迄だし、さうでなければ拒絶する迄さ。」と、勝彌は何でもない事の様に答へた。

「それだと、何だね。君の意に合はなかつたなら、一人失戀の美人が出来る譯なんだね。」

「それは止むを得んさ。」

「それは惨酷だね。」

「其様事を云つたら、迂濶女とは友人にもなれないし、また女の居る家には下宿も出来ない事になるし、山へでも入ッつて、滅多に里へも出られない譯だね。」と、勝彌は高聲に笑つて見せた。

都根子は夫と勝彌との談話を考へながら聞いて居たが、此時小首を傾げて、

「久能木さん、貴方見たいに情に厚い方が、今仰有つた様な事が御出来なさいますか知ら。私、疑問ぢやないかと思ひますは。」

「僕も其を懸念するのさ。」と、紫瘦は微笑みながら、「其娘さんが、君に身を捧げた愛で



も、君は斷じて拒絶すると云ふのかね。」

「んっ。」

「君に其が出来るか知ら。君は一方に意志が強いかと思ふと、存外また情に脆いところがあるんだから、僕も妻の云ふ通疑問だと思ふんだよ。」

勝彌は微笑みながら首肯す。

「其は確かに僕の弱點だ。けれども、意氣地なく情の前に叩頭する様な事は無いから、安心して呉れたまへ。」

「それは然様かも知れないが、併し、」と、紫瘦は暫時考へて居たが、「萬一君の方が先づ戀に落ちて、娘さんが應じなかつたら如何するかね。」

勝彌は唯微笑むのみだ。

「蒼川君、君は其様事は無いと思ふのかね。」

「いや、無いとは云はない。或ひは其様事になるかも知れない。けれども、僕は人を強る事は嫌ひだから、美都子が僕の愛を却いたら斷念する迄の事さ。」

「それが疑問なんだが。」

紫瘦が都根子を見返ると、都根子も頭を傾げた。

「其處へ行くと僕は強いつもりだ。僕は人の愛を却け得ない事はあるかも知れないけれども、自分を制する事は必ず爲し得ると信じてる。」と、勝彌は毅然として、「僕は自分愛さない者の前に跪いて迄も、其愛を要求しようとは思はないから、他へ意を轉ずる事を工夫する意だ——屹度工夫して見せる。一方の失敗を他方で取返す——創作に努力するなり、他の事業に奮闘するなりして、其處に満足を求めるのだ。失意の時に奮闘すれば、必ず自ら救ひ得るものと信じてる。僕の今日までの經歷が其なんだ。」

「併し、其は戀ぢやなかつたらう。」

「それはさう。」

「他の場合なら知らないが……僕には依然疑問としか思はれないね。」

「内の先生に賛成です。」と、水鏡は何時か座敷の入口まで廻寄つて居た。

「マア失禮な。」と、都根子が振返ると、水鏡は唐紙の蔭に身を避けた。



「小川。」

勝彌が呼ぶと、「え。」と、水鏡は顔を出す。

「君の心から推したら、疑問どころちやあるまい、殆んど奇蹟を聞くの思を爲てるんだらう。」

紫瘦と都根子が笑出したので、水鏡は此上何を云はれるか知れぬと、また影を隠した。

「だけれどもねえ、蒼川君。」

暫時してから紫瘦がまた云出さうとしたので、都根子が支へて、

「久能木さんは大丈夫ですから、煩擾く仰有る事はありませんは。」

「紫瘦君、君の注意は嬉しく承けたよ。」

「ぢやア、もう止すとして。」と、何か考へて居たが、「兄さんは何様人だね。」

「美都子の兄かね。今の所は懶惰漢だ。けれども、僕の云ふ事だと能く聞いて呉れるから、弟の様な氣がして、非常に可愛いんだ。」

「御羨威で居らッしやいます。」

「廿歳、いや十九だとか云つてました。」

「美男子ださうだね。」

「もう。僕は彼位綺麗な男を、未だ會つて見た事が無い。」

「そんなかね。ふうむ。」と、紫瘦は變乎と勝彌を見て、「僕の宅へも、些と遊に寄越して呉れたまへ。」

「美都子さんも御一緒に連れ下さう、お待ち申しますから。」

「機會がありましたら同道します。」

「何卒。」

「本當に遊に寄越したまへ。」

勝彌は首肯しながら、

「では、原稿は五六日内に御届けするよ。奥さん、大變長座しました。」

「まア御宜いでせうのだ。」

「また伺ひます。」



勝彌は紫瘦の家を辭して、土手に沿ふて、新見附の方へ歩を運ぶと、其邊の女學校の生徒らしい十八九の廂髪が一人、前へ立つて行くのである。

「美都子も早く彼如して遣りたい。」

覺えず斯く吐き、女學生が新見附の角を四番町の方へ折れたのを、殘惜しさうに見送つた。

(一五)

柏木には勝彌の留守に、其友人の林國雄が訪ねて來た。元二は豫て勝彌から林の事を聞いて居たので、勝彌は太田紫瘦方へ行かれたので、間も無く歸宅される筈だから、暫時お待ちなすつては如何ですと、寧ろ勧める様にして勝彌の居室なる座敷へ請じ入れたのであつた。

國雄は元二の美しいのは、豫て勝彌の話に聞いて居たけれども、今更ながら驚かされ

た。而も、其様子が無邪気で、初對面の自分に對する調子が親切で、勝彌が可愛い男だよと云つて居たのも思合される。懶惰漢だとか云たけれども、それは懐子で育つて、憂世の辛酸など知らう筈がなく、自分は如何にすべきかとの自覺が無いからでもあらう。一朝責任を自覺する時が來たなら、飄然として精力家にならぬとも限らぬ。分て久能木の努力主義の感化を受けたら、存外早く其時が來るかも知れぬ。此美しい人の方からは、久能木と一緒に居るのが仕合せだけれども、久能木が此家に來たのは幸か不幸か、頗る疑問だなど考へて居たところへ、美都子が茶を持って出て來た。

美都子は持つて來た茶を傍に置き、先づ丁寧に叩頭を爲た上で、其茶を進めると直ぐに茶の間へ退いて了つた。

「成程美人だ……蒼川は、彼美色に既に囚はれてるんぢやないか知ら。」と、國雄は胸中に斯く吐き、覺えず太息を吐いた。

傍を見返ると、懶惰漢だと云ふには似ず、元二が切々と淨言を爲て居る。

「君、御勉強ですな。蒼川君の原稿の様ですが、淨書すんですか。」



「もうです。」

「若川君も、大分勉強してると見えますな。」

「えへ。」と云つて筆を措いて、「宅へお居でなさつたのは昨夜でしたから、まだ勉強なさる間が無かつたんです。ですが、今後大いに勉強するッて云つてお居ります。」

友情に厚き國雄は微笑みながら首肯いた。

其處にまた美都子が菓子器を持つて來て置いて行つた。

國雄は見る度に美しさの増す美人だと思ひながら、

「久能木君は、もう歸る時分でせうか。」

「もうお歸宅なさるだらうと思ひます。直ぐに歸ると云つてお出掛けでしたから。」

國雄は時計を出して見て、

「久能木君が歸つたら、今夜にも僕の宅へ來て呉れる様に云つて下さい。」

「もう少しお待ちなすつては如何ですか。」

「他に廻るところもあるのですから。」と、考へて居たが、「君、筆と紙を貸して呉れたまへ。」

「御手紙ですか。」

元二は淨書して居た白紙の重の中から、二三枚抽取らうとしたが、つと耳を側て、

「久能木先生が御歸りになつたんでせう。表の耳門が開いた様です。」

格子戸が開くと元二が直ぐに聲を掛けた。

「先生、お歸りですか。」

「さうだ、僕だ。」

元二と美都子は座敷と茶の間から急いで出迎へる。

「林さんが先刻からお待ちですよ。」

「林君か。丁度好かつた。」と、勝彌は袂から菓子袋を出して、「美都子さん、お土産です。」

尤も、元二君も僕も食へるんですせ。」

「さうも。」とばかりで、美都子は微笑みながら袋を受取りて押感く。

勝彌は美都子が微笑を含んだ折の眼の麗しさを見ると、云ひしらぬ快き感じがするのである。それは始めて美都子を見た時からの感じて、昨夜此家に移つてからは、別して其感

My name is Ikeyashi



じが強くなつて、切々と心に迫る様である。今しも其感に打たれて恍としながら座敷へ入ると、國雄が見返りながら笑を含んで居た。

「能く待つて居て呉れたね。太田へ行つた歸途に、餘程君の家を訪ねようと思つたけれども、今夜にも出直さうと思つて歸つて來たので、丁度好かつた。」

「一歩違で、辭去どころだつた。」

「さうか。待たせて失敬だつたね。元二君、茶を一杯呉れたまへ。」

元二は茶の間へ行く。

「太田には何か用でもあつたのかね。」

「相談したい事があるから來て呉れて、手紙を寄越したから、何かと思つて行つて見たんだ。」

「奴が相談したいて云ふのは、何だつたかい。」

「なに、〇〇社で僕の原稿を欲いつて云ふんださうな。」

勝彌は無條件なら書いても可いと云つたら、紫瘦が澁りながら承諾した事を話して、

「だから書く事に承知したんだ。」

「それなら書いて遣つても可いさ。併し、と、國雄は眉を擡めて、「氣を附けないと、其様事から彼派に捲込んで了うよ。」

「それは大丈夫だ。けれども、紫瘦も今日は存外眞面目だつたよ。尤も、妻君が傍に居たからかも知れないが、僕へ注意して置く事があるとお出でなさつたんだ。」

「ふむ、彼男が、い。」

勝彌は聲を潜めて、自分と美都子の關係に就いて、紫瘦が云々せし始終を語つて、

「……さう云ふ譯なんだ。」

「さうかね。」と、國雄は疑乎と考へて居る。

「君、何を考へてるんだ。」

國雄は更に聲を潜めて、

「僕も實は杞憂に堪ないんだかね。」

「君もかい。紫瘦黨がまた一人殖えた譯だね。」



勝彌は可笑さうに笑つた。

「僕を紫瘦黨とは酷だね、併し。紫瘦が云つた様な疑問が起らないとは云へないよ。」

「だから、紫瘦黨だと云ふんだ。」

「まア聞きたまへ、僕は今の中に娶る、と云掛けて、茶の間を見返つたが、呷くほどの低聲で、今の中に娶つた方が可かアないかと思ふ。僕の母も同意見だがね。」

勝彌は目を睜つて何とも云はぬ。

其處に美都子がワッブルを入れた菓子鉢を持つて来て、

「戴いた御土産で御在ますけれども……。と、後ははささ云得ないで顔を赧くしながら去らうとする。

「兄さんも貴方も食べて下さいよ。」

「澤山頂戴してありますの。」

「真箇ですか。」

「えへ。」

「お客さんと僕に茶を下さい。」

「はい。」と、座敷を出て行つた。

「真箇美人だ。大體の婦人には、何處にか缺點があるものだけれど、其が見出せない。就中眼が美しいね。」

「僕も然様思つてる。」

美都子は二人の茶を持つて座敷へ入ると、國雄が眼を放さず見て居るので、何となく不快を感じながらそこへ退いた。

「彼で貞淑でさへあつたら、申分ないぢやアないかね。速かに結婚した方が可いだらう。」

「君は不思議な事を云ふね。」と、勝彌は呆れもしたかの體で、「君は僕が此家へ轉宿するのさへ反對したぢやアないか。」

「それは反對したさ。併し、結婚の事は、其時も云つた意だ。それに今となつては一層事情が進んでるんだから、更めて通告する必要があるらうと思ふ。」

勝彌はワッブルを撮んで食べながら、



「君は如何かぬ。」

國雄は勝鬨を見ながら微笑むだ。

座敷の二人の談話が低聲だから、元二は遠慮して能く茶の間に引込んで居た。で、此處にも千代乃元二美都子の三人の間に、話が囁かれて居るのだ。

千代乃は元二がワツプルを大口に食べて居るのを見て、

「叔父さんにも残してお遣りよ。」

「どう。」と、元二は不快な顔を爲て、残の分を眼で數へながら、「御祖母さまが早くさうお云ひなされば、僕が此様に食ッ了やアしなかつたんだ。叔父さんに取つて置くんだと、父さんの分が無くなッ了ふんだ。」

「父さんも何だけれども、叔父さんだつて一日銀行で勉強してお居でなんだからね。」

「其代には好きな眞似を爲てるんですからね。それに比ぶれば、父さんこそ可哀想だ。御祖母さまは、叔父さんの事だど何かに同情お爲なるけれども、父さんにだと實に冷酷だ。」

「そんな譯ではないけれども、叔父さんは財産はお無くしなされたし。」

「それを今云つたつて、何にもなりやしないでせう。」

「それは然様さ。だけれどもお前、」

「お祖母さま。」と、美都子は千代乃の語を遮つて、「私のを取つて置いてよ。」

「何人にか。」と、元二は屹度美都子を見る。

「父さまにですはは。」

「それなら可いけれども、」と、元二は囁く様な小聲だけれども鋭い語調で、「叔父さんは一人で發澤してるんだから、僕には同情しようと思つたつて同情が出来ないんだ。月給だつて、一月だつて持つて歸つた事は無いでせう。何か買ッ了ふとか、食ッ了ふとかして、一同が何様に困つてたつて平氣で居るんでせう。それに、昨夜なんぞの云草は如何です。此様結なんざ犬だつて食はないツて……叔父でなきやア張倒して遣つたんだ。」

千代乃が何か云はうとしたのを美都子は止めて、座敷を指しながら、

「聞こえると外聞が悪クツてよ。兄さんももう何にも云はないで頂戴。後生だから。」

元二は首肯く。千代乃は煙管に煙草を塞めながら、時計を見上げる。其處に壺所からお



瀧が入つて来て元二に向ひ、座敷を指し飯を食べる手真似を爲て見せて、

「如何だらうね。」

「さうねえ。」と、小聲で、「先生に伺つて見やうか。」

「伺ふなら来て戴いてにお爲かい、よ。」と、お客に聞かせるを辭去を促す様なものだが口には出さないが注意する。

元二は唐紙の此方から差覗いて、

「先生、鳥渡何卒。」

「何だね。」

勝彌が茶の間に来ると、お瀧が此方へと招いて、

「お客さまですから、何か取りに遣はしませう。」

勝彌は時計を見上げながら、

「御面倒でせうから、何處か食へに出掛けても可いんです。」

「何ですぬえ、面倒だからなんて。其様御遠慮には及びません。御出掛けなさるなん、

無駄な事はお止しなさいませよ。」

「どうですか。」と、勝彌は頭を掻く。

「ぢやア、此方で何か見繕ふ事に爲ませうねえ。」

「何卒よろしく。」

「下宿屋に居らした時とは違つて、今では宅の方なんですから、些とも遠慮なんぞなさらないで、我儘を仰有る様でなくツちやアね。」と、莞爾する。

「いや、僕が悪かつたです。何卒願ひます。」

勝彌はお瀧の語が酷く嬉しくツて、此人一人を何だか面白くなく思つてたが、ヤツぱり親切な好い御母さんだたと、自分の思違を羞かしい様な氣がしながら、座敷に歸つた時まで莞爾して居た。

國雄は得意らしい勝彌の様子に、

「君、何したい、大分得意らしいが。」

「いや、何と云ふ事は無いけれども、僕は昨夜から新しい生活に入つて、而も愉快な事は



かしたから、嬉しくッて為様が無いんだ。」と、一入莞爾する。

「それは山田に居た時とは違ふだらうさ。山田は純然たる下宿屋だし、此方は家族的の待遇だらうし、其は大いに違ふ筈だ。」

「それなんだ。君が僕の處に来て呉れると、當家の客と同一に思つて呉れるんだから、僕は愉快で溜らないんだ。君、山田は如何だつた。思出しても憤慨に勝へん事があつたんだからねえ。」と、其當時を追想して覺えず眉を揚げて、「君も彼時は共に憤慨したつげが、僕が困つてた時、君に飯を供さうと思つて話を爲ると、彼の脹滿の老婆め、とうと二時過迄も膳を出さなかつたぢやアないか。君を無理に止めといて、とうと飯を食はせないで返した時は、僕は實に心で泣いたんだよ。それに比べると、此家の御母さんは親切だ。僕は未だ一文も宿料を入れてないのに、大いに君に御馳走しようと思ふんだ。僕は實に感謝に勝へないんだ。君、今日は快く飯を食つて呉れたまへ。」

「どうかい。僕も快く御馳走にならう。」

格子戸の開く音がして、人が出て行つた様で、其足音が女らしかつたのは、御母さんか

美都子が御馳走の買入に行つたのであらうと察して、勝彌は氣の毒の様な嬉しい様な心地が爲て居た。

「蒼川君」と、國雄は懷中を探りながら呼掛けて、「君の都合もあらうと思ふから、新聞社に談判して、殘の原稿料を受取つて來たよ。」と、紙包を机の上に置く。

「濟まんかツたね。僕は此で助かるんだよ。」と、勝彌はつくづく國雄の好意を感謝しながら、「此で此家へ食料も入れられるんだよ。いつもながら、君の好意には感謝する。」と、紙包を取上げて、「殘餘の全部受取つて呉れたのかい。」

「さうなんだ。五十圓ある筈だから、改めて見て呉れたまへ。」

「君が受取つたんだもの。改める必要があるもんか。」と机の抽斗に入れる。

「尤も、僕が改めはしたんだがね。」

「だから、僕が改めるよりか確かなんだ。更に何か御馳走しよう。」

「無駄な事は止したまへ。昨日迄の君で無いと云ふ事を、君自身でも覺悟しなくちや不可よ。山田に居た時見たいに、不規律な事では困るよ。別して金錢に就いて然様なんだ。君は



餘り金銭に淡泊過ぎる。それが君の長所でもあるかはりに、また短所でもあるんだよ。自分の利害からばかり萬事を打算するのも妙でないが、全然利害を度外に置くのも考物だらうと思ふね。結局、君に自重して欲しいんだ。長者に對して此様事を云ふのは失敬だけれども、僕の平生を能く知つて、呉れる君なんだから、僕は思つただけの事を云ふんだよ。君、悪く解つて呉れちや困るよ。」

勝彌は頻りに首肯しながら聞いて居たが、覺えず肅然として、

「君だから直言して呉れるんだ。林君、僕は誓つて君の忠言を服膺して、以來深く自重する。君の云ふ通だ、昨日までの僕でなかつたんだ。僕は直情徑行で、自重する事を知らなんだ。一歳にしろ二歳にしろ年長でありながら、君に教へられるのは汗顔の至だけれども、僕は非常に嬉しい。今後、遺憾なく直言して呉れたまへ。」

「さう云はれると、僕の方が汗顔の至なんだ。それにねえ。君、」と、俄かに小聲になつて、

「美都子さんの事も考へて置きたまへよ。」

勝彌は首肯いた。

「僕の母も頻りに此事を云つてゐるんだから、頃日に遊びながら来たまへな。」

「さう爲よう。」

二人の話が途断れると、元二が食卓を運んで来て、二三種の副食物が列べられる。酒はと云ふのを國雄が辭して、元二をも此團欒に加へ、美都子の給仕に、快く箸を取るのであつた。

(一六)

未だ洋燈を點火するほどではないが、障子には既や夕の色が襲ひ掛つて、室内が何となく陰氣だ。元二は疾に淨書を止めて茶の間に行き、勝彌は机に背を倚せて、取留めて何を思ふともなく考へて居ると、何處からともなくえならぬ佳き香氣が不圖襲つて来る。

「佳い匂だ。何の香氣だらう。」

呟きながら見返るともなく床を見返ると、小さい土鉢に何か植ゑたのが置いてあつて、



佳い香氣は其から來るのらしい。

「彼の香氣か。」

勝彌は土鉢を取上げ明い方へ出して見ると、白い莖を有つた葉の丸い草がつい〜と繁つた中から、別て高く莖を抽いた紫色の花が一輪、見るからしほらしく咲いて居る。

「お、莖か。」と、花を嗅いで、「やつぱりバイオレットの香氣だ。香水や石鹼のバイオレットは可厭だけれども、直ぐ花から來る自然の香氣だと、些とも可厭な氣がしない。床なんぞに置くよりか机の上に借りて置かう。」

勝彌は莖の鉢を机の上に置いて、優しい花の色香を飽かず愛で居る。

元二が洋燈を點燈して持て來たので、「元二君、此莖は君のかね。」

「其句莖ですか。美都子が仕立てるんです。」

「美都子さんが……嗅いで見たまへ、實に佳い香氣だよ。」と云ひながら自分がまた嗅いで見て、「句莖と云ふんだね。」

「さうです。」

元二は嗅いで見ようともせぬ。

「美都子さんは園藝の趣味を有つてると見えるね。」

「彼奴は草花が好きで、暇さへあれば弄つてるんです。」

「園藝が好きなのは、婦人相應の趣味で善いね。君は嫌ひかね。」

「嫌ひぢやないですが、面倒臭くッて世話なんか眞平です。」

「ぢや、花だけなら見ても可いッて主義なんだね。」

「まア然様ですね。」

「横着主義と云ふんだね。」

勝彌が笑へば元二も笑ふ。

其處に美都子が夕飯の膳を持って入つて來て、勝彌の前に据ゑながら、

「兄さんも先生と御一緒に食上るの。」

「僕かい。さうさねえ。」と、勝彌の顔色を見る。

「元二君、僕は皆さんと一緒に食へたいんだからねえ。僕は久しく孤獨の生活を爲て居



たんだから、一家團樂の趣味を味ひたいのが希望なんだよ。君から御母さんへ御話して呉れて、今夜から然様云ふ事に願ひたいんだがねえ。」

茶の間にも聞こえた見え、お漣が唐紙越しに、

「明日から然様云ふ事に願ひますから、今夜だけ其方で食上つていただきます。美都子ちゃんや先生が御一人でお淋しく居らつしやらうから、兄さんのお膳も其處へお上げなさい。」

「はい。」と、美都子が元二の膳を持つて来る。

勝彌は箸を取りながら、

「美都子さん、此羹を僕に貸しといて下さいよ。」

「何卒。」

「貴方は園藝が好きださうですね。」

美都子は顔を赧めながら、

「花が好きで御在ますから。」

「葉の外にも咲いてる花があるですか。」

「今、葵とオキザリスが咲いてますの。」

「オキザリスつて何です。」

原名を答へるのも生意氣らしいと思つたのか、

「何で御在ますか。酸漿見たいな葉の草で御在ますの。」

「今咲いてるんですか。」

「今……。」と躊躇つて、「日光があたりなくなると萎んぢまみますの。」

「では、明日咲いてる時に見せて下さい。可愛い花でせうな。」

「えへ。桃花のと、白と黄と三種ありますは。桃色のが可愛らしい御在ますの。」

「明日是非見せて下さいよ。葵もですよ。」

元二は二人の談話に頓着せず飯を食つて居たが、突如に大きな聲で、

「おかはりだ。」

「はい。」

美都子が給仕盆に兄の飯碗を受けた途端に、がら／＼と格子戸を開ける音が爲て、



「美都子、早く来なく。」

何處か勇のある聲は重勝である。

「御飯は兄さんがよそふから、早く玄關へ行つて御覽。」

元二が斯う云つたので、美都子は急いで玄關へ行つて見ると、父の重勝が料理でも入つて居さうな折を突出して、ぶらぶらさせながら。

「それ御土産だ。まだ飯は済まないんだらう。」

「先生と兄さんだけ、今食上つて居らしてよ。」と、美都子が折を受け取らうとすると、ふんと酒の香が爲る。「父さま、お酒を召上つたの。」

「うむ。今日は大いに奢つて来たんだせ。ははは。」と、さも面白さうに笑いながら、「奢つたつても、乃公一人樂まふつてんぢやないんだ。それッ、其折を明けて見な。お前の好きな栗の金團も澤山入つてれば、元二の好きな蒲鉾も入れさせた筈だ。それから、お祖母さまには、口取に付いてた焼鳥つてんだが、見たばかりでも好味さうだせ。母さんは好悪なしの何でも屋なんだから、一同の嫌いな物は悉皆遣つ丁ふが可いんだ……あ、好心地だ。此の心地

つたらないせ。あ、愉快〜。」と、履物でも脱げないのか、沓脱をよろ／＼と上つたり下りたりして他愛がない。

美都子は座敷の勝彌に聞かれるのがさまりが悪く、折を傍に置いて、父の手を引上げる様に引張ながら。

「此様處で何か云つてらッしやると外見なくつてよ。さア早くお上り遊ばせ。美都子が引張つて上ますから、さア。」

「こゝ、そんなに引張つたつても、無、無理に引張つたつても、」と、争ひながらも引上られた途端に、敷居に脚を奪られてはたりと畳の上に倒れた。

「あらッ。」

美都子が驚いて抱き起さうとして居る所へ、お瀧が鐵三を抱きながら出て来て、

「まア、如何なすつたて云ふんでせう、美都ちゃん、珍らしいぢやないかねえ、父さんがお酒なんぞを。」

「母さま、其折を持つて行らして頂戴。父さまは私か。」



美都子は辛との思で父を起して、肩に掛ける様にして茶の間へ連れて行つた。

座敷では勝彌が微笑みながら元二に對ひ、「父さんは酒が好きなのかい。」

「いゝえ。」と、元二は頭を振つて、「寧ろ嫌ひな方なんです。今日は何處かで強ひられて、つい酔拂つたんでせうよ。」

「さうかねえ。如何にも愉快さうだ。」

茶の間では重勝が美都子の肩を離れて倒れる様に坐ると、千代乃に對つて平素よりは一入丁寧に叩頭を爲したが、體は尙ほふらつき、舌は纏れながら、

「母様、今日は何も大出来なんですね。へへ。些ばかりですが、十五兩つてものが、こ懐中をこそく探しながら蝦蟇口を取出し、くしやくしやくに捻込だ一圓札や五圓札をませこせに引張出して、「お瀧、今日一日の働にしちやア剛氣だらう、え。」と、大得意の體だ。

「本當に大層な働だことねえ。」と、千代乃が冷かな語調で、「何千圓て資本をお消耗しのお前さんが、初めてお儲のお金にしては、本當に大出来さね。」

重勝は一時に酔も醒めるかと冷りとして、眼をばちつかせて居るのみだ。お瀧は覺えず

息を呑んで横を向く。美都子はお祖母さまの云ひ様は餘り酷過ぎると、父が可哀相で祖母の顔を凝乎と見て居る。

座敷の勝彌も覺えず眉を顰せると、元二は突と立つて茶の間へ行き、

「父さんお歸りなさい。」と、平素にもなく媚え語調で、「僕には蒲鉾のお土産ですつて。僕は大好きなんだから早く食べたいんだ。母さん、其折を此處へ頂戴な。早く、早く、早く下さいつて云ふのに、さう。」

母を促して折を出させて開けて見て、

「うむ、好味さうだ。美都子、皿を持つて来るんだ……何を恐圖くしてるんだよ。お前の金圓なんか何人が手を出すもんか。」

「あら、私そんな事なんか、思つても爲ないのに。」

お瀧は態と聲高に笑出して、

「兄さんが食べたいから調戲つてお居でなんだよ。早く皿を持つて来てお上げ。」

「兄さんは随分だは。」と、藥所へ皿を取りに行く。



元二は祖母に對つても嬌え語調で、「御祖母さまは相變らず焼鳥が好いでせう。」

「私かい。」と、千代乃は優しい聲で、「お前が佳いとお思ひの物を残しといってお呉れ。ほんの標しばかりで可いんだよ。」

お瀧は傍から眼で座敷を指しながら、

「先生に上ちや失禮だらうかね。」

「可いでせう。」

元二が答へると千代乃が眉を擡せて、

「残物なんか、失禮だからお止しが可いよ。」

「え、残物ですツて。」と、重勝は覺えず千代乃の顔を見上げ、「其中には、残物なんか一つも入つてやしないんですア。母様に召上つて戴かうと思つて持つて来るのに、残物なんぞ入させて如何します。口取にしたツて、金圓にだツて箸を着けやアしないんですせ。炒鳥だツて、蓮根一つ食べたんぢやアありませんや。残物を母さまに持つて来たと思はれちや、如何に何だツて心外でさア。」と、顔に酔の跡は尙ほ残りながら、横を向いた時は眼が潤んで居た。

「重勝、勘忍してお呉れよ。」と、千代乃も自分が云過ぎたと思つたので、「内の者ばかりなら、残物だツて可いがね、先生へ上げるんだと、迂濶した事も出来ないと思つたもんだから、つい今見たいな事を云つたのは、私が悪かつたのさ。氣に掛けないで下さいよ。」

「氣に掛けた譯ぢやありませんが、私が残物なんかを、」

「所天、もう可いちやありませんか。母様が思違を爲すつたと云つてらつしやるんだから。」と、お瀧は重勝を和めて置いて、「美都子ちゃんや、早く持つてお出でよ。」

美都子は疾く皿を持つて茶の間に来ようとしたのだが、祖母と父の爭論を聞くのが辛く、其が濟んでからと猶豫して居たのだから、母に呼ばれると直ぐに入つて来て、兄の前に盆に載せた五六枚の皿を置いた。

元二は皿を傍に引寄せて、

「先づ御祖母さまのからだ。それから僕、次が美都子。母さまは自分で取つて下さるとしてよ。」

「元二君、僕には。」と、勝彌は重勝に氣の毒なので、態と大きな聲で斯う云つた。



「先生、食べて下さるんですか。」

「頂戴しないですか。だから、先刻から御飯のお代を爲ないで待つてたんぢやアないかね。随分意地が穢いだらう。」

「先生が食べて下さりや、私も本望ですア。」と、重勝は大いに意氣が揚つた様子だ。

「其様事を云つて下さると好い氣になつて、一人で悉皆頂戴して了ふですよ。は、は、は。」勝彌が笑出したので、茶の間にも始めて笑聲が發つた。

「耳門の開いた様な音が爲てよ。」

美都子が聞耳を立てると、格子戸近く男の聲で、

「柏木さんて仰有るのは、お宅様ですか。」

「どうだ。」と、勝彌が怒鳴る様に答へる。

「お酒を持つて参りました。」

「お酒をツて。宅が違やアしないか知ら。美都ちゃん行つてお見。」

「はい。」と、美都子は立たうとする。

「違やアしないんだ。乃公が今命つて來たんだ。」

「父さまが命けて居らしたの。」

美都子が急いで玄關へ行つて見ると、男は格子戸を開けて入つて、四合入の壺二個を式臺の上に置いて、

「難有う御座ます。」と、直ぐに格子戸を出て行かうとする。

「お代は。」

「先刻頂戴致しました。」

「どう。」

男は歸つて行く。美都子は二個の壺を兩手に提げて茶の間に來る。見れば、ヘーバーの文字鮮かに菊正宗と讀れる。

「母さまに一盃召上つて戴きたいと思つて、鹽町の酒屋に命けて來たんですよ。」と、重勝は美都子が置いた正宗の壺を取上げて、お流の手近に澄直し、「お流早く燗を付けて上げて呉んな。」



「私にお呉れなのかねえ。」と、千代乃は機嫌が直つたらしく、「私にばかり此様に爲てお呉れだと、御氣の毒でならないよ。それに、儲かつたからと云つて奢つてお丁ひだと、」

「いえ、其様氣で奢るッて譯ぢやありませんがね、母さまが、此邊のお酒は不味つて不可いて云つてらッしやつたし……それに何時でしたッけか、些し苦味はあるが、菊正宗が佳いッても云ひなすつた事がありましたから、それで態々探して來たんですよ。ですから、何卒召上つて下さいな。お溜、早く畑を爲て上るが可い。美都子や、栓拔は何處にあつたッけな。」

「栓拔は其の火鉢の抽匣でせうよ。御祖母さま、二番目の抽匣を開けて見て頂戴。」

千代乃は抽匣を開けながら、

「重勝、餘り御氣の毒だけれど、切角だから嬉しく貰ひますよ……栓拔は此だつてかね。」

「それです。頂戴。」

お溜は鐵三を美都子に抱せて、正宗の栓を抜いて置いて、茶棚の袋戸棚から畑徳利を取出し、鐵瓶に畑を漬けて置いて、千代乃の膳を拵らへ、

「元二、お祖母さまのおよそひかい。」

「御祖母さまのですか。それッ。」

元二が出した皿を、お溜は千代乃の膳に載せる。元二は自分と勝彌の分と二皿を持つて立上り、

「父さま、頂戴しますよ。」

座敷に來て勝彌の顔を見ながら、小聲になり、

「先生、本當に食べて下さるんですか。」

「無論頂戴するさ。」と、大きく云つて後は小聲で、「君の今夜の態度は、大いに氣に入つたよ。以前彼の調子で、御祖母さんと父さんの間の調和を計るが可いよ。御祖母さんだつて、父さんだつて、好人物達だけれども、何か感情の行違があるらしいね。」

「もうなんです。」

「其融和を計るのは、君の任だと思つて大いに勉めたまへよ……君、失敬だが飯を盛つて呉れないか。」

「美都子は今孩兒を懐いてますから、僕がよそつて來ませう。」



元二が茶の間に飯をよそひに行く、お流は急いで美都子の手から鐵三を取つて、

「美都ちゃん、御給仕を爲てお上げ。」

「兄さん、私御給仕してよ。」

兄の手から茶碗を受取り、飯をよそつて座敷へ持行き、

「つい手が塞つてまして、失禮致しましたは。」

「なアに。飯櫃を此方へ拜借した方が可いんです。明日からさうして下さう。」

勝彌は斯う云つては見たもの、實は美都子に給仕を爲て貰つた方が珍味の數々を膳に置かれたよりも嬉しいので、それを自分でも氣が付くと、心にも無い事を云つて、人を欺き自を欺いたのが羞しくなつて、頬の火照るのを覺えた。

茶の間から千代乃が、

「先生、御酒は如何で御座ますか。」

「難有う。もう御飯を食へましたし、それに、今夜は勉強したいと思ひますから、また頂戴しませう。」

「御勉強を爲さるんちやねえ。」と、千代乃は本意なげな語調であつたが、「母さん、お前さんは如何かね。」

「さうですねえ。」「二杯御相伴致しませうかねえ。」

「父さんは。」

「私は最う充分です。」

「母さん、御猪口を御出しなね。」

「此にぼつちり頂戴。」

「湯呑にかい。」

「ぼつちりですよ。」

座敷の勝彌はぼつちりにしても湯呑ではと、一方ならず驚いた。

千代乃が快く酒を喫んで呉れるので、重勝は云ふまでもなく、お流も心嬉しく、湯呑に

三分一ほどの酒を飲むと、はや眼の縁を赤くしながら、

「先刻から伺はうと思つてましたが、今日のお金は、何の口が出来たんですか。」



「王子の二萬坪の方なんだ。」

「え、王子の方が出来たんですって。」と、お瀧は調子外の高聲で、「王子の地面の賣買が出来たにしては、十五圓で事はありますまいにねえ。」

「それが其の、」と、重勝は頭を掻き、「外の手から其相談が纏つたもんだから、此方の手合は實は鼻毛を抜かれた譯なんだよ。」

「まア。」と、お瀧は眼を睨つて、「だから、私が彼様に氣を揉んだんぢやありませんかね。それなのに、所天が昨日も一昨日も怠慢けて居らつしやるもんだから、他に先越されて了つたんですよ。尠くも五百圓にはなる筈だったのが、たつた十五圓とは餘り情な過ぎますは。」

「何も詮方が無いんだ。」と、重勝はまた頭を掻く。

「だって、餘り満らないぢやアありませんかねえ。」

「だから、大いに掛合つて、乃公と長谷とに十五兩宛出させる事に爲たんだ。」

「ぢやア、餘り大出来でもありませんのね。これで當にしてえた五百圓は、たゞの夢にな

つたんですね。」

お瀧に斯う云はれると、重勝も今更ながら自分の怠慢やら不運やらが口惜い様で、何故今一番發しなかつたらうかと、自分の不甲斐ないのがまた一入口惜いので、返事も爲かねて居たが、俄かに勇のある語調で、

「其方では失敗したが、お瀧、お前に喜ばせる事があるんだよ。お前ばかしぢやアない、母さまにも喜んで戴く事が出来たんですせ。母様、何卒喜んで下さい。」

千代乃は喫掛けた猪口を膳に置き、お瀧は鐵三を抱いたまゝ膝を進めて、齊しく重勝の顔を見る。其處に美都子が座敷の膳を下げて來ると、重勝は見上げながら、

「美都子や、お前も其處に坐つて聞くが可い。」

「鳥渡待つて頂戴、兄さんのお膳も下げて來ますから。」

美都子は元二の膳を下げて來て、膳端のと共に出入の邪魔にならない處に片寄せ置き、祖母と母の間に坐つて、

「父さま、何の話を爲て下さるの。」



「何の話つて、面白い話なんだ。」

「さう。嬉しう御在んすはねえ。」

「美都ちやん、金圓をお食べが可いよ。」

「私御膳の時に戴いてよ。」と、父が何を話すかと、その顔を凝乎と見て居る。

「母さまや私が喜ぶ話ッて何様事ですか、早く話して下さつたら可いでせう。」

お瀧に促されて重勝の語るところに依ると、先年池田と云ふ男に信用貸に無證文で用達て置いた八百圓の金が、池田の行方知れずになつた爲めに、催促にも道が盡きて居たのである。然るに、今日計らずも下谷で端なくも池田に出會ふと、池田は今日まで數年間臺灣で實業に従事し、多少の資産を作つて、此の頃東京へ歸つて來たとやらで、恩借金もお返し爲たし、御禮も申したく、頻りに柏木家の現住所を探して居たところである云ひ、下谷西町の其家に伴はれて様子を見たのに、満更虚構でも無いらしい。けれども、彼の男の事だから、明日再び彼に逢ひ、確と相談を爲た上で一同へ話をする意であつたと云ふのであつた。

お瀧は覺えず相好が崩れるまでに喜び、

「彼のお金か復へらうものなら、本當に一資本出來るんですから、何かまた好い商賣を考へて置いて、」

千代乃は傍から遮つた。

「もう、商賣なんぞは止してお呉れ。其お金が懲返ることになつたら、せめて半分だけは長夫に返して遣つてお呉れよ。私が云はないだッて、お前達も其氣でお居でだらうとは思ふけれども、念の爲に云つて置くんだよ。さうしてお呉れたと、お前達を怨んでお居での長夫の意も解けようし、私も長夫に義理が立つのだし、それこそ一家和合して何様に樂いか知れないよ。重勝も、お瀧も、今度は何卒其だけの事を爲て遣つて下さいよ。私が頼むんですよ。い、だらうね。」

重勝もお瀧も答へかねて、唯顔を見合せて居る。

千代乃はむツとした體で、

「二人とも返辭をお爲でないのは、私が今云つた事を、悪くお思ひだと思えるね。」



重勝は周章して、

「いえ、其様事はありませんよ。母さまの仰有つた事は、能く解つてゐるんですが、どうも其の、未だ何とも御返事が出来ない様な鹽梅式なんで。へい。」

「如何してですか。」

「池田が呆して返して呉れますか如何ですか、未だ其さへ分らない様な譯なんですからねえ、へい。」

「まだ其様話なのかねえ。私は、明日にももうお金か手にお入りかと思つたんだよ。」

「いえ、如何して、なか／＼未だ其様譯ぢやないんです。」

「どうかねえ。」と、千代乃は拍子抜の氣味で、「だけれどもねえ、重勝、池田からお金が復つたら、長夫に其だけの事は爲て遣つてお呉れたらうねえ。」

「それは無論ですは。」と、お瀧が引取つて、「ですけども、それも回つて来る金額に依るんですから、其時能く御相談爲ようぢやありませんか。」

重勝はお瀧の援に氣勢を復して、

「池田が八百圓耳を揃へて返して呉れば、長夫さんにも分けて遣れますし、美都子を清水に養女に遣らないだつて済みます。」

美都子が祖母の顔を見ると、太い筋が額に縦に一本見はれて居た。

「重勝。」と、千代乃は屹度した語調で、「美都子はね、池田から金が回らうが回へるまひが、養女になんぞ何様事があつたつて遣りはしないよ。夢にだつて其様事を思つてお呉れでない。私は可愛い孫を、囨に爲せる事は不承知だからね、忘れないで能く覚えて居て下さいよ。」

重勝は何とも云ひ得ないで黙つて居る。

勝彌は重勝の語に計らず不快を感じたが、千代乃の語を聞くと覺えず胸が開けた様な氣が爲る。と共に、美都子を自分の妻に貰つて欲しいのは、千代乃と元二の意志で、重勝とお瀧とは關知らない事をも知り得た。一家合意でない云ふ事は、如何にも物足ないけれど、其が爲に現に美都子に對して懐いて居る希望を捨てようとは思はぬ。柏木家に同居してから、未だ僅かに十日の上に出ないけれども、美都子の美貌と其優しい女らしい態度とに、



既に全然其心を奪はれて居るから、何様な支障が起らうとも希望を達せずには置かぬとの念の火が、断えず焚えつゝあるのだ。けれども、強て其念を制へて、色にも形にも見すまいと勉めて居る。で、今夜の茶の間の人々の談話が、何となく氣掛の様で、次には何様な話を聞くことかと耳を澄して居たが、何人も何とも云出さず、唯森としてる中に、猪口に觸れる徳利の音が折々聞えるのみだ。

美都子の御祖母さんも、父さんも母さんも、皆な悪い人ではないが、つまり生活の不如意からつい感情が衝突したり何かして、彼通に和合しないのだ。此に千圓近くの金が乃公の手に在れば、其を投出して忽ち解決をつけて了ふのだけれども、今の乃公に其様力は無い。金の力は無いけれども、何とか一家和合の策を講じなければならぬ。其策とても、今は思得ない……静かに考へたら、其策が無いとも限らぬ。今夜に迫つて如何と云ふのではないから、乃公が必ず其策を案じ得て、屹度解決をつけて見せる。美都子を愛してる乃公の心の火は、支障となるべき何物をも焼盡して、斯うと思込んだ希望を達しない中は、決して力を失はない、決して消える様な事は無いのだ。

勝彌の頭は酷く熱して来て、風は寒くとも家外の氣に觸れたくてならぬ。

「元二君、散歩して来るが、君も来ないか。」

勝彌が黙つて居たので、傍に茫然して居た元二は之に力を得て、

「お供しませう。」

勝彌は斯くと茶の間に聲を掛けて、元二と共に散歩に出掛けた。

(一七)

勝彌は紫瘦を介して〇〇社から依頼された小説を書く爲に、一昨日昨日と二日掛、昨夜深更に到つて辛と脱稿したのである。昨夜寝に就いたのは三時近い頃で、今朝眼が覺めたのは十一時である。

此様に眠る筈ではなかつた。元二と早起の約束を爲て居て、自分から破る様な事で他を導かうなどは思も寄らぬ。今日は元二に違約を謝して、明朝からは復た早起をせねばな



らぬなご、思ひながら、手早く寝具を疊んで置いて茶の間へ行くと、千代乃が一人火鉢の傍に居るのみで、平素よりは寂しい感じがする。

勝彌は頭を掻きながら、

「非常に寝忘れて了ひました。元二君は何處へ行かれたんですか。」

「頭まで參るとか申しまして、今少時前出掛けました。」

「さうですか。此様に朝寝を爲ちや、元二君へも面目ないですな、僕が勸めて早起の約束を爲て置いて僕から破つてゐるんですからな。」

「夜深くまで勉強なさる方と、さうでない元二とは一緒になりませんよ。昨夜は三時頃まで御勉強の様でしたね。」

「さうでした。早く顔を洗つて了ひませう。」

勝彌は茶の間を臺所へ行かうとして、不圖障を見ると、布團を頭から被つて寝て居る者がある。

「僕より寢坊の人があるんですな。」と、千代乃を見返つて、「御病氣なんですか。」

「いゝえ。長夫なんです。今日は日曜だもんですから。」

「さう、今日は日曜でしたな。」

臺所へ行くとき其處も森として居て、お瀧も美都子も見えない。

「此様に寂しい事は珍らしい。美都子は何處へ行つたらう。」

斯く呟きながら不樂しさに茫然立つて居ると、若い女の話聲が裏で爲出した。

「今日遊に伺つても能う御在んすか。」

「貴女御一人。」と、問返したのは美都子の聲だ。

「え、私一人ですの。」と云つたが、暫時してから、「私の學校の方で、貴女に紹介して欲しい方二人ありますのよ。二人とも今日御出での筈なんですがね、貴女其方達と御友達になつて下さる事出来なくッて。」

美都子は暫時返辭を爲なかつたが、懸て口籠調子で、

「兄に聞いて見てからですと、御返辭が出来ませぬさうさ。」

「兄さんは今御留守？」



「えい。」

二人の談話は途斷れた。勝彌は微笑を含みながら耳を澄して居る。

「美都子さん、御宅に頃日に在らッしやる方ね——皆さんが先生くって云つてらッしやる方が居らッしやるでせう。」

「えい。」

「何を教へる先生なの。」

「小説を御書きなさる方ですッて。」

「え、小説家？」と、意外と云ひたさうな語調で、「彼方が小説家ですッて。」

美都子は何とも云はない様子だ。

「小説家ッて、私もッと優しいハイカラの方だと思つたのよ。彼方は何方かと云ふと、橙カラですはね。私何方かへ御出掛なさる所を見てよ。何だか、大柄の目の可怖い方ね」

勝彌は覺えず苦笑して、尙ほ耳を澄して居る。

「貴方の兄さんも、小説家にお成んなさるんでせう。」

「兄なんか成りたいと思つたつて成れませんは。」

「其様事はなくッてよ。」と、不平らしく云つて、「兄さんなら本當の小説家らしいはね。」

勝彌は美男でなきや小説家らしくないとは面白い事を云ふ女だと、笑出したいほど可笑いのを疑乎と耐へて、また何を云出すかと耳を傾むけた。

「眞個ですは。」と、若い女の聲には力が籠つて、「貴女の兄さんだと、何にお成りなッつても似合ない事は無いは。お美しい方はお徳ですはね。」

「兄が美しいんですッて。」と、美都子は軽く笑つた氣配だ。

「そりやお美しくッつてよ。私の學校では大評判ですよ。だから、皆さんが見たがつて大騒ぎですは。毎朝、私を誘に来る方が五人ばかりあるんですよ。それがね、實は悉皆貴女の兄さんを見ようと思つて来る方ばかりなのよ。私本當に馬鹿だはねえ、私が誘つて貰つてる氣かなんかで、一々禮を云つてるんですもの。ほへほ。」

美都子も笑聲を漏した。

やはり乃公の想像通だッたんだ。先日の朝、隣家の入口に見掛けた女學生等は、元二の美



しい顔を見たい爲に集つて居たんだ。今の女學生の大部分は、彼通鐵面皮だから乃公は嫌ひなんだ。今美都子と話して居る女は、隣の娘らしいが、今日遊に來たいと云ふのも、其眞意は元二に近きたいんだ。美都子の友達になりたいから紹介して呉れって、隣家の娘に頼んだ彼等も矢張其なんだ。將を虜にせんと欲せば先づ馬を射よか。何様女が此様に鐵面皮なものであるのか。先づ隣家の娘から面を見て遣らうと、勝彌は水口の腰高障子に破でもあらばと見廻したけれども、頃日紙を張替へたばかりらしいので見當らぬ。

「何だ、乃公は顔を洗ふのを忘れて居た。隣家の娘も馬鹿だが、乃公も馬鹿だ。」

覺えず苦笑しながら、棚の金盞に眼を遣つた時、四十近いかと思はるゝ女の聲で、

「加根子や、加根子や。」

「はい。」と、高く答へたのは美都子と話して居た娘で、「美都子さん、後刻上つてよ。」

「え、何卒。」

二 馳出した足音の遠去り行くのが聞こえる。

勝彌は半娘の後姿を見て遣らうと思ひながら障子を開けると、見返つた美都子は一

方ならず吃驚いた様子で、

「あら、先生がお起きになつたは。」

美都子は小聲に呟いて急いで家内へ入る意で、水口へ馳けて來ると、勝彌は後手に障子を閉めながら、齒磨粉まじりの唾を下水へ吐いて、

「美都子さん、草花は何處に培養してあるんです。葵と、其に何とか云ふんでしたな、酸漿に似てるとか云ふのは。」

「今日は、丁度三種とも咲いてますは。」

勝彌は美都子の後に尾いて行くと、もとく五坪にも足らぬ明地の、物干場に大部分を占められた其一隅の、出来るだけ花壇にして、其中央に方二尺ばかりの上に硝子戸を載せた箱温室が据ゑてあつた。花壇の處々に草の芽の萌初めたのはあるが、まだ蒼らしい物さへ見えないのだ。

箱温室の硝子戸には、裏一面に水蒸氣が露を結んで、中は、さぞ見えなけれども、花らしい色が朦朧と透いて見える。



「其箱の中に在るんですな。」

「え、温室でなきや、逆も咲かせられませんは。」

硝子戸を開けやうとした美都子の手を見るより、勝彌は覺えず眉を寄せた。また水を見る姿き朝々を、別けて冷たき水道の水に雑巾掛なぞ爲せらるればこそ、甲は腫れ指は脹れて、見るが如く醜くはなつたのであらうと、比ぶべきものもなく可哀想になりながら、眼を其横顔に轉せは、黒く艶かな髪の毛の、廂の端からはらく落掛つた三筋四筋が花の如き頬を掠めて、透いて見える乳色した耳朶から領足へ掛けての美しさには、手を憐れがつた眉の蹙も何時しか消えて、既に開けられた温室の中の花にさへ眼は移らず、唯恍惚として居るのみであつた。

美都子は箱温室の硝子戸を覗いて、充分見て貰ふ意で、勝彌が既に見て居て呉れることゝ思つて居た。それなのに、勝彌が何とも云はない——孰がオキザリスかとも葵かとも問はないので、變に思ひながら見上げる。勝彌は疑乎と自分の顔を見下して居た。

勝彌がはつと思つて極の悪い顔を爲たので、美都子も極が悪くなつて顔を赫めながら、

眼を温室の花の上に移した。

温室の中には、紫だの赤だの黄だの桃色だの、種々の草花が眼もあやに咲亂れ、其上に日光が一杯に當つて居て、何の匂とも知れぬ香氣に噓るほどだ。

勝彌も花を見れば美しいとは思ふ。けれども、何故か豫期して居た程に美しい感じが爲ない。眼はまた美都子の上に落ちた。

「美都子さん、其紫色の野菊の様な花で、違つて咲いてるのは、何と云ふ名なんです。」

「此方。」

「いえ、其方の其丈の高い方です。」

「何と申しましたッけ。」

美都子が鉢を廻すと、草の名を記した附木が刺込んである。勝彌は讀んで見て、

「シネラリヤと云ふのか。」と、眼を彼方の鉢に轉して、「其の櫻草見たいな葉の奴ですな。

花も櫻草に近い様ですが、其は何んと云ふんです……分つたですよ、附木に書いてあるから。え、と、プリムラ、オブコ、ニカ——プリムラ、オブコニカか。名はいやに云ひ難い



が、花は中々可憐しいですな。葵は孰れです。」

「葵で御在ますか。」

美都子は目覚るばかりの朱色の花を指して、

「これが然様ですの。」

勝彌はまた附木の文字に眼を置いて、

「原名はセラニウムと云ふんですな。や、莖が幾鉢もある……美都子さん、其黄色い花は。」

「此がオキザリスで御在ますの。」

「あ、さうですか。此方の桃色のも、其方の白色のも、同種ですな。成程、葉は宛然酸漿だ。」

「ですから、植木屋は花酸漿と申しますさうです。」

「花酸漿。成程、植木屋の付けさうな名だ。オキザリスよりか、花酸漿の方が雅で好い。」

と、勝彌は白色の花の鉢を取上げて見ながら、「僕は大きい氣に入つた。美都子さん、机

の上で眺めたいから貸して下さい。」

「お持ちなさるのは能う御在んすけども、日光が當らないと萎んで了ひますの。」

「さう、さう云ふんでしたな。」と、勝彌は本意なげに花を見ながら、

「はなぐ、しい日光の前には美しく咲いて、日蔭に置くと萎んで了ふ……人の或場合も此に似てる……さうだ、僕が昨夜脱稿た小説に含ませた意味が其なんだ。未だ題を附けなかつたが、此草の名を其極用ゐても可いな。花酸漿——些と古いかな。なに古くつたつても構はない。花酸漿で可なりだ。美都子さん、小説の題に貴女の花の名を借りますよ。い、でせうな。」

美都子は微笑んだ。

「此は名ばかり借りる事にして、其葵は鉢共借りるですよ。」

「はい、何卒。」

勝彌はオキザリスの鉢を元の處へ返し、葵の鉢を持って立上る。美都子も温室に硝子戸を嵌めて同じく立上ると、隣家の庭から加根子が見て居たのである。



加根子は何と思つたのか、くるりと後を見せた。

勝彌は笑を含んだ小聲で、

「元二君なら小説家らしいと云つたのは、彼人でせう。」

美都子は吃驚して眼を睜り、

「あら、聞いて居らして。」

勝彌はからりと高笑をする。

加根子は自分を笑つたと思つたのか、一寸振返つたが、つと便所の蔭に入つて了ふ。

「彼の娘が通學するのは、何と云ふ学校ですか。」

勝彌が問ふと、美都子は稍垂頭加減になつて、

「番町邊ださうで御在ますよ。」

勝彌は暫時美都子の顔を見て居たが、

「美都子さん、貴女も学校へ通つちや如何です。兄さんの話したと、小學校を卒業なさつただけだと云ふ事ですが、今日の婦人は、今少し學問を爲さく必要がありやせんかと思ふ

んです。貴女に其希望が御在りでしたら、僕は何様にでも盡力する覚悟です。如何です、學校に通ふ事にしては。」

美都子は一入深く垂頭いて、返辭をしない。

勝彌は美都子の態度を見て、意外の感に勝へなかつた。家計が許さないで、止を得ず小學以上の教育を受け得ないで居るのだから、當人の身に取つては残念にも思つて居ようし、例へば隣家の娘が學校へ通ふのを見ても、嘸を羨しからうしするから、學問を爲れる道を開いて遣つたら、何程喜ぶか知れぬと思つて居たのに、何と返辭もせねば、顔に嬉しさうな色の浮ぶのも認められなかつた。

「美都子さん、隣家の娘が學校へ通つてのを御覽なさつたら、貴女羨しいでせうな。」

「いへえ。」と、美都子は低い聲で幽かに答へたのだが、勝彌の耳には強く響いた。

「ぢやア、貴方は學問を爲たくないと云ふんですか。」

「其様事はありませんけれども……。」と、後は云詰む。

「では、學問は爲たいけれども、學校へ行くのは可厭だと云ふんですか。」



美都子が答へようと爲した時、水口の障子をがらりと開けたのは元二で、

「美都子、座敷の掃除を早く爲て呉れなや困るぢやないか。直ぐに行つて爲て呉れ。」

「はい。」

美都子は駆出して臺所へ入ると、元二が美都子の下駄を突掛けて出て来て、

「先生、其様満らない花を如何なさるんです。」

「机の上に置いて眺めるのだ。」

「色が濃過ぎて、毒々しいぢやありませんか。」

「さうでないさ。僕も餘り強い色の花は好まないがね、他に花の無い時節に、而も此頃の様に寒氣の劇しい時なんぞには、この強い色の花が、非常に好感想を興へるものなんだ。僕は會て経験した事があるから、態々此葵を擇んだんだよ。」

「さうですか。僕が持つて行きませう。」

「さうかね。僕は未だ顔を洗はなきやならないから、頼むよ。」

勝彌が葵の鉢を渡すと、元二は其を持つて家の方へ行く。

「元二君。」

勝彌が元二を呼止めると、振返つた元二は何を認めたのか、隣家の庭の方へ眼を遣つて變な顔を爲たので、勝彌も其方を見ると、前に背を見せて、次いで身を隠した隣家の娘が、何時の間にか境の四目垣近くに出て来て、羞しい顔もせず立って居たのである。

「熱心なもんだ。」

勝彌は冷笑ひながら呟いたが、

「元二君、其葵は僕が行くまで、縁側に置いて呉れたまひよ。」

「はい。」

「唯其だけなんだ。」

元二の後から勝彌も臺所に入り、顔と髪を洗つて座敷に行くと、掃除は既に済んで、

元二が火鉢に火を入れて居たところだ。

「元二君、葵は何處に置いたね。」

「仰有つた通り縁側に置いてあります。」



「難有う。」

勝彌は縁側の障子を開けて葵を取入れ、机の上に置いて、つくづく眺めながら、

「元二君、見たまへ。一鉢離して見ると、一層美しく見えるだらう。弱い色だったら、此ほどの感想は逆も發らないね。」

「成程好い色ですな。先生の仰有つた通だ。僕も何か持つて来ようか知ら。」  
元二も清しく眼を張つて飽す眺めて居る。

「机の上では何だか工合が悪い様だね。」と、勝彌は燈乎と天竺葵を見据ゑながら、頭を傾けて、「花の背に障子があると、前が陰になるばかりでなく、棧などを籠て見るから如何も面白くないんだ。」

「どうですか知ら。」と、元二は然様でもないと言ひさうな顔を爲て居る。

勝彌は葵の鉢を床の上に移し、燈乎と眺めて居たが、覺えず莞爾して。

「うむ、此方が可い。背後が暗くツて、其處に朱色の花が浮いてる様で、如何にも調和が可う。」

「大きに然様ですな。僕には元來此様趣味が無いんですが、それでも能く調和した物を見ると、好感覺が爲ますよ。」

「誰だつても然様さ。」と、勝彌は尙ほ花に見惚れて居る。

「先生、僕は今川小路まで行つて来ますが、彼方面に御用はありませんか。」

「今川小路に行くのかね。」

「筆が欲しいと思つて通へ行つて見たんですが、此邊の筆屋には碌なのはありませんもの。」

「さうかも知れないね。僕にも四五本買つて来て呉れたまへ。水筆が好いんだよ。方寸千言でも金不換でも、水筆でさへあれば可いから、四五本買つて来て呉れたまへ。」

「承知しました。他に御用はないんですね。」

「さうさね。」と、勝彌は考へて居たが、「さうだ、君に太田の宅へ寄つて貰はうか。」

「太田さんと云ふのは、紫瘦と云ふ人の事ですね。お宅は何方です。」

「牛込見附内の蛙原だ。道筋は委しく教へるから待ちたまへ。」



昨夜脱稿げた小説に標題を書入れて、

「此原稿を届けて呉れたまへ。富士見町五丁目の廿番地なんだ。」  
尙ほ道筋を委しく教へて、

「……それから、君に注意して置く事があるんだ。太田の家に、小川水鏡と云ふ男が居るがね、素行の修まらない可厭な奴なんだから、親く交つちや不可よ。彼奴は必ず君と交りたがるから、相手に爲ちや不可よ。いゝかね。」

「はい。」

「太田に逢つたらね、よろしく願ふと云ふ事だけを云つて置いて呉れたまへ。もし太田が留守だつたら、妻君に逢つて、さう云つて置いて呉れるんだ。」

「承知しました。」

元二は茶の間から袱紗を持つて来て、原稿を包みながら、

「小川つて人は、太田さんの書生ですか。」

「まア書生見たいなものなんだ。君、決して親くなつちや不可よ。」

「大丈夫です。其様人と交際する必要はありません。」

「では願ふよ。僕は林を訪ひたいと思つてるから、途中まで同行しても可いんだが……いや、僕は未だ朝飯前だつた。では、太田に宜く云つて呉れたまへ。」

元二は間もなく出て行つた。

勝彌は兎角床の上の葵に引附けられて、またもや眺入つて居たが、誰か来た様な氣配が爲たので見返ると、睡むさうな眼を爲た長夫が差覗いて、薄ぼんやりした聲で、

「久能木君、お早いですね。」

勝彌は覺えず笑出して、

「さア、君が遅いのか、僕が早いのか、お互に早いのか云ふ資格はなさへうです。」

長夫は異様な聲を爲て笑つたが、笑つたまゝの口から欠伸に移つて、両手を高く伸しながら姿を隠したが、

「美都ちゃん、叔父さんに湯を取つてお呉れ。」

「美都子は先生に御飯を上げなさいやならないから、自分で御取が可いよ。」と云たのは千



代乃の聲で、「私が取つて上げるから、前にお行で。」

千代乃と長夫が墓所に行く足音が聞こえる。

滅多に墓所なぞへ行つた事のない御祖母さんが、湯を取つて造りに行つたのには驚く。義理ある子であらうが、中々能く務めて居られる様だ。併し、義理があると云ふ點から見ると、美都子の父さんも同様であらうのに、彼と此の間には大なる相違がある。所謂性が合ないと云ふものか、他に深い事情があるからであるのか、どうも怪しいと、勝彌が不思議がつて居ると、遅なほりましたと謝しなから美都子が膳を進めた。

(一八)

二月の末には珍らしいほど暖かく、而も好天氣であるから、都根子は裏の日當の好い處に洗濯盆を控へて、膚附の物を洗つて居ると、お玉が板の間に憐しい足音をさせて、水口の障子から半身を乗出して、

「奥さま、大變で御在ますよ。」

「え、大變だつて。何が大變なんだよ。何かまた粗相でもお爲なのかい。」と、都根子は濡手を打振りながら立ち上がる。

「いゝえ、其様事ぢや御在ませんの。」と、お玉は日頃の赤い頬を一入赤くして、何故か俄に笑さへ浮べて、「久能木さんの御使の方が入来ッしやいましたよ。」

「何だねえ、久能木さんの使が来たのなら、其通を早くお云ひが可いのに、大變だなんて云ふから、吃驚したぢやアないかね。」と、また蹲まうとする。

「あら、彼方へ行らして貰くので御在ますのに。」

「私にかい。」

「はい。先生が御留守なら、奥さまにお目に掛りたう御在ますつて、云つてお居でなさんですよ。」

「小川さんは居ないのかい。」

「はい。御支關にはお見えなさいません。」



「困るはね。」

都根子は袷處に入ッて、水道の水で手を清めて居ると、お玉が小聲で、

「役者見たいな方で御在ますよ。」

「久能木さんの使の人がなの。」と、都根子は急いで手を拭きながら、「ちやア、美都子さんの兄さんがお入來なのよ。其様に綺麗な方なの。」

「えへ。」と、お玉は耳朶まで赤くして居る。

「直きにお目に掛りますからッてね、座敷へお通申してお呉れ。」

「お座敷へで御在ますね。」

都根子が首肯くと、お玉は衣紋を直したり尻を撫廻したりして玄關へ行く。

「美都子さんの兄さんなら、玉が役者見たいだッて云ふのも無理は無いは。だけども、其様に綺麗なのかね。」

美根子は鏡臺に對つて髪を撫付け、ちよいく着の羽織に着替へて座敷に行くとな、なるほど羞明い様な青年が坐つて居る。

「入來ッしやい。」と、會釋を爲した時の都根子の顔は酔つた様に赤くなつた。「玉やお茶を持つておいら。」

「はい。」と、お玉は茶の間へ入ると、奥さまも顔を赤くなすつたとくすりと笑ふ。

元二は袷紗を開いて原稿を取出し、

「久能木先生が御當家の先生と御約束の、原稿を持つてまわりました。」と、都根子の前に置いて、「何卒宜敷く御願ひ申しますと申されました。」

「さうで御座ますか。確に頂戴致しました。太田が歸りましたら、然様申して置ます。」と、

都根子は一應取上げた原稿を、また疊に置いて、「久能木さんはお變も居らッしやいませんか。」

「はい、不相變御元氣です。」

「さうですか。何時でも生々した御様子ですから、御目に掛つてお話を伺つてますと、此方まで愉快になりますは。」

「さうです。私なんども、先生が宅に居らッしやるので、何か、非常に愉快でしてな、知



らす識らず勉強する氣になりますのです。」

「さうで居らっしゃいますとも。本當に好い方で御在ますは。」

「それでは、太田先生へ宜しく願ひます。」

元二が辭去らうとするので、都根子は稍周章氣味で、

「今お茶を……玉や、お茶をお早く爲てお呉れ。」

元二は切角の人の好意を無にもされず、もじくして居るところへ、小川水鏡が歸つて来た。

水鏡は座敷に都根子の話聲がするので紫瘦が歸つて居るのかと思ひ差覗くと、見知らぬ青年の後姿が見えた。

「奥さん、只今歸りました。」

「何處へお居でなさつて。」

「鳥渡、神樂坂に買物に行つて来たんです」と、水鏡は答へながら座敷へ闖入つて、斜に男の横顔を認ると、早くも其と察した。

「奥さん、此方は柏木君でせう。」

「どうですよ。」

元二は自分の名を呼ばれたので見返ると、自分より一二歳兄らしい年輩の男が笑顔を作つて見て居た。此男だな、久能木先生が御警戒になつた小川なる者は、と思ふと何だか可厭な奴にも見えるのだツた。

水鏡は笑掛けながら會釋を爲て、

「柏木君、僕は小川水鏡と云ふ者です。君の事は、久能木先生や兒玉君から聞いて居たんです。以來御交際を願ひたいですよ。」

元二は水鏡の會釋相應の會釋を返したのみで、何とも云はない。

水鏡は膝を進めて、

「兒玉君は君の家へ行れたでせうな、久能木先生がお移になつてから。」

「いえ、見られません。君は、兒玉君も御承知なんですか。」

「竹馬の友です。」



「そうですか。」と云ひながら、水鏡を見た眼には輕蔑の色が浮んだ。

「玉や、お茶は如何お爲なの。」

「はい、今持つてまわります。」

「早くだつて云つてるのに。」

お玉は茶盆に元二と都根子と二人前茶を持つて来て、

「お湯が微温かつたので御座ますから。」

「さうかい。御苦勞だつたね。」と、都根子は元二に茶を進めて、「御待たせ申して済みませんでしたね。」

「頂戴致します。」と、元二は快く茶を喫んで居る。

都根子の眼も水鏡の眼も、吸寄せられもするかの様に元二の顔を離れぬ。お玉も鳥渡くと茶の間から覗いて居る。

此男の妹だつたら其美しさが想やられる。久能木氏が直ぐ其家に轉宿したのも、兒玉が其を嫉んでるのも無理はない。自由になるものなら、乃公だつて其様美人の傍に居たいんだ。

久能木は好運な男で、實に羨ましい。しかし、未だ美都子と關係があると云ふのもあるまいが、兒玉が躍起となつてるところから思ふと、何か彼奴に見るところがあるんだと見える。ものは試だ、一つ探を入れて遣らう。水鏡は斯う思付くと無遠慮な語調で、

「柏木君、兒玉君から聞いたんですが、御妹さんと久能木さんと結婚なさるさうですが、御目出度いですね。」

都根子は無作法な問様をする人だと、覺えず水鏡を睨んだ。

元二は顔を赧めながら苦笑したが、それでもはさとした語調で、

「妹を貰つて戴く意では居るんですが、まだ久能木先生の御承諾を得ないんですから、如何なるか知れないんです。」

水鏡は覺えず眼を睨つて、

「久能木先生が承諾しないんです。君の方から妹さんを遣らうと云ふのに………解らんですな、久能木先生の意志が。奥さん、貴女如何お思ひなさるです、久能木さんの意志を。」

「私ですか。さうねえ。」と、都根子は微笑んだ。



水鏡と云ふ奴は、聞いて居たよりも可厭奴だ。此様奴とは談話を爲し居るのも厭やだ。既う用はないのに、何時まで此様に爲て居る事はない。早く辭去に如すだと、元二は都根子に對ひ、

「何卒宜しく願ひます。御邪魔を致しました。」

「まア貴方。」

「いづれ又伺ひます。」

「君、まア可いでせう。」

元二は水鏡には答へず、突と立上つて玄關へと出て行く。都根子は水鏡と共に送つて來て、

「久能木さんに宜しく仰有つて下さいよ。貴方または是非お遊に入來ッしやいよ。」

「はい、また伺ひます。」

「美都子さんには、未だ御目に掛まされけれども、私が宜しく申しましたッて、御傳を願ひますよ。そしてね、今度入來ッしやる時に、御一緒にお連れなすつて頂戴よ。」

「難有う。」

元二が辭し去つても、都根子と水鏡は暫時は玄關に立つたまゝ茫然して居た。

水鏡は太息を吐いて、

「奥さん、世の中には美しい男があればあるもんですな。僕もせめて、柏木君の半分も美男に生れて居たかつたです。美男子だとは聞いて居たですが、彼程ぢやないと思つてたんですよ。柏木君の前に出ちやア、僕なんぞ男の數ぢや無いですね。」

「私はね、あの兄さんの妹さんではあるし、女だけに一層美しい様だッて久能木さんがお云ひでしたから、美都子さんの美しさが想像されてね、早く逢ひたいと思つてよ。」と、これも亦太息を吐く。

「僕も御同感です。僕は柏木君の後を追掛けて、押掛に遊びに行つて見様かと思ふんです。」

水鏡の語が了るか了らぬに格子戸ががらりと開いたので、二人が差覗くと紫瘦が歸つたのだ。



紫瘦は都根子の顔を見るより、

「實に美しいもんだせ、僕は驚いちやったよ。」

「ちやア、所天お逢ひなすつて。」

「逢つたから、美しいと云つてるんぢやないか。」

紫瘦の後から都根子も水鏡も座敷に入つて来て、

「先生、奥さんと今も其話を爲て居たんですがね、僕は彼位美しい人を、」

紫瘦は眼を睜つて、

「小川、君も見たのか。君の敏捷なものには驚くね。君は何時見たんだ。」

「何時つて、唯た今です。」

「なに、唯た今。」

「私も見ましたは。」

「え、お前も見たつて。」

「見ましたとも。唯た今まで、此處で話してお居でだつたんですもの。」

「さうですとも。唯た今辭去られたばかりなんです。」

「これは可笑い。」と、紫瘦は二人の顔をじろく見ながら、「お前達が見たと云ふのは何人を見たと云ふんだ。」

都根子も小首を傾げながら、

「所天が見たつて仰有るのは、何人の事で御在ます。」

「僕が見たと云ふのは、柏木の美都子なんだ。」

「え、所天御覽なすつて。」

「うむ見た。お前達の見たと云ふのは。」

「柏木の元二君です。」

「何、美都子の兄が来て居たのか。惜い事を爲た、乃公も逢つて置きたかつたつげで、何かい、やはり美しいかい。」

「素的です。人間ぢやありません。さながら神ですな。美都子さんも美しくいんでせうな。」



紫瘦はにこ／＼笑ひながら首肯いて見せる  
水鏡は夢中に乗出しながら、

「先生、御首肯さなすつたばかりで、御自分だけ、思出笑なんぞ爲さるのは罪ですせ。美しいにも種々あるんですから、何處が如何此處が斯うツて、具象的に御話を願たいですな。え、先生、其様に御自分ばかりで楽しんで居らッしやるのは慘酷ですせ。先生、／＼。」と、せがみにせがむのである。

都根子も美都子が何様に美しいかを早く聞きたいけれども、水鏡のせがむのに委せて置いて、夫が口を開くのを熱心に待構へて居る。

「先生、いつまでおじらしなさるんです。僕が此様に願つてるのに、早く話して下さつたつて可いちやありませんか。奥さんだつて、聞きたがつて居らつしやるんですよ。先生、御自分だけ楽しんで、早くさア、早く話して下さつても可いでせう。」と、水鏡は立つて居たら自轡踏んだかも知れぬ。  
紫瘦は憎いほど沈着はらつて、

「唯美しいと云ふより外はないね。何處が美しいの、此處が美しいのツて云ふのは、他に多少の缺點があるからして云へるんだけれども、何處から何處まで優劣なしに美しいんだから、僕には一々説明する事なぞ出来ないんだ。だから、唯美しいと思ひたまへと云ふより語が無いんだ。彼女の兄がさながらの神なら、彼女はさながらの女神だ。いや神以上かも知れんね。都根さん、お前だつて、恐く美都子の缺點は見出し得なからうよ。」

「其様ですかねえ。」と、都根子は何故か、伏目になつて考へて居る。  
水鏡はもう他愛が無く。

「先生、僕を柏木へ遣つて下さい。久能木さんに何か御用は無いですか。僕を先生の使に遣つて下さい。先生のお話だと、如何しても其人に逢はなきやア、到底其美を知る事が出来ないんでせう、到底想像で知れる普通の美人ぢやないんでせう。僕は直ぐに行つて逢つて來ます。先生、久能木さんに何か用を作へて下さい。」

「君、今行つたつて久能木は留守だよ。」  
「久能木さんなんか留守だらうが留守でなからうが、居ようが居まいが、其様事は如何で



も可いんです。」

「それは不可よ。君は婦人に對すると危険だから、一人では遣れない。君が滿らん事も仕出來すと、僕の信用に關するから、柏木に行きたきや、僕が行く時に同行したまへ。」

「僕一人では不可いて仰有るんですか。」

「さうなんだ。斷じて許さなのだ。」

「慘酷ですなア。」と、水鏡は落膽して、唯目をばちくさせて居る。

紫瘦は暫時黙つて居たが、暫時して太息を吐き、

「久能木と云ふ男は幸運な男さ。」と云つて吐く様に、「久能木と知らない中に、乃公が美都子を知つて居たら、乃公は何程高い價を拂つても美都子の愛を求めただけれど、久能木に先んせられて残念だ。」

「これは驚いた。先生にして其様事をお云ひなさるに至つては、驚くの外は無いですな。」と、水鏡は都根子を見返つてにやりと笑ふ。

都根子は笑もせねば口も開かぬ。それが取も直さず不快の感を懷いて居る印とも見られ

る。

紫瘦は苦笑を爲たが、都根子の顔を見ると、忽ち大聲に笑出して、

「いや、今のは戯言さ。僕が獨身時代だったらだね、或ひは其様意志が發つたかも知れない、と云ふだけの事なんだ。」

水鏡は此處だと云ふ意氣込で、

「ぢやア、先生も獨身で御居で、したら、やはり婦人に對しては危険人物……僕と五十歩百歩、いや十歩の差も無いんですな。」

「そんな事はない。」

「いえ、少くも柏木の女神に對しては、僕と共に其靴の紐を結ぶ方なでせう。は、は、どうですとも。」と、都根子は冷かに夫の顔を見て、「久能木さんは、貰ふとも貰はないとも未だ返辭をなさらないんだって云ふから、所天が結婚を御申込なさるが可いは。」

「お前は何を云ふんだ。」

「私……私は所天の都合の好い様に爲て上げようと思つてるのよ。」



都根子はふいと立つて茶の間へ入った。

紫瘦は首を締めながら、後臍に皺を寄せて笑つて小聲になり、

「女は如彼だから、迂濶した事が云へないて。」

水鏡も小聲で、

「先生のお云ひなさり様も、些と過ぎたようですね。」

「過ぎたかも知れんさ。」と、紫瘦はまた首を締めて、「僕は心中私かにさう思つてたもん

だから、つい口へ出して丁つたんだ。實際美人なんだからねえ。久能木には惜いもんだ。僕

が早く知つてたら、既に何とかなつてたかも知れないんだが、其を思ふと實に残念だよ。」

水鏡は吁鳴る様に太息を吐いたが、俄に元氣を見せて、

「久能木さんが先に知つて居たつて可いぢやアないですか。其様遠慮を爲さるには及ば

んですな。」

「だつて君、友人が愛してる婦人だと知つて居ちやア、眞逆に不徳義な事も出来んぢやア

ないかね。」

「其處に頗る妙な事があるんですせ。」と、水鏡は茶の間を見返りながら、「一入小聲になつて、柏木で美都子を貰つて呉れと云つてるのに、久能木氏がまだ承諾を與へないと云ふんですから妙でせう。」

「ふへひ。」と、眉を顰せて、「君は如何して其様事を知つてるかね。」

「元二氏が話したのです。其は奥さんも聞いてお居でなすつたんですよ。」

「さうかね。併し、信じられんね、久能木が承諾せんと云ふのは。」

「ですが、確に然様云つたんですせ。」と、水鏡は冷笑ひながら、「君子然として居て、其實街氣満々たる久能木氏の事ですからな。容易は承諾しない様な事を云つてるのかも知れんですね。ですから、久能木氏が愛して居らないものとして、大いに手段を講じちや如何でせう。僕は何だか久能木氏が氣に喰はんです。兒玉も大いに衝んでるんですから、彼奴を使嚇して、妨害させるのも一手段ですせ。兒玉は柏木の家の人とは、以前から悪意に爲てるんですから、別して妙だらうと思ふんです。」

「そんな事も出来んかね。」とは云つたが、斷じて止せとも云はなかつた。



水鏡が何か云はうとした時、足音が爲たので躊躇すると、都根子が入つて来て、

「先刻申上げるんですけど、柏木さんが持つてお居で、した久能木さんの原稿が、お机の上うへに置いてありますよ。何卒よろしくと申す事でした。」

「さうかい。」と、紫瘦は原稿を取上げて標題を讀むより眉まゆを顰める。

都根子は又茶の間へ行ツて了ふ。

「小川君、久能木は此だから困るんだ。此標題を見たまへ、花酸漿はなかたばななんざ古臭ふるくさくツて、少くも十年は後れてるね。新進しんしんの作家にも似合にあんぢやアないかね。」

「さうですな。花酸漿はなかたばななんて無意味むいみですな。」

折しも格子戸かかしどが明いて、

「御免。」と、高く呼んだのは紛れもない勝彌かつやの聲だ。

二人は覺えず顔を見合せた。

「直ぐ通して呉れたまへ。」

水鏡は急いで玄關げんくわんへ行き、直ぐに勝彌かつやを座敷へ案内した。

紫瘦は勝彌かつやの顔を見るより、

「能く来たね。先刻君の宅を訪ねたんだよ。」

「それは失敬した。林を訪ふ用があつたもんだから、留守にして居た。大に失敬した。」

「まア坐りたまへ。原稿を有難う。大層早く出来たぢやアないかね。」

「併し、上出来ぢやない様だ。」と、高く笑ふ。

都根子は自身茶を持つて出て来て、

「久能木さん、入らッしやい。」

「先日は失禮しました」と、勝彌は會釋しながら茶を受ける。

「先刻柏木さんが入らッしやつたんですが、御構ごかまも致いたさないで、失禮致いたしましたから、貴方あなたから宜く仰有つて下さいよ。」

「いや、未だ書生しよせいなんですから、餘り鄭重ていじゆうに爲て下さらんが可いのです。」

「僕は逢あはんで残念ざんねんだったかね、非常ひじょうな美男子びだんしだツてね。小川こがわなんざ、さながら神かみだなんて云つてるよ。」



勝彌は唯高く笑つたのみだ。

水鏡は何か云ひたさうに口を動かしたが、勝彌の前で何か云へば、蛇度窟められるのが業腹なので、耐へ耐へて黙つて居る。

紫瘦は都根子を見返つて、

「麥酒を抜いてお呉れ。下物は何か……火腿が尙だ有つたらう……なに、悉皆になつたッて……ビスケツトでも無いよりか勝だ。」

都根子が立たうとしたのを勝彌は止めて、

「僕は麥酒は用らんですから。」

「君は盛に用の方ぢやアないかね。」

「近來止す事にしてる。麥酒を用ると直き腹を悪くするから、用らん事に爲て居る。」

「日本酒は。」

「用らん事もないが、今は欲しくもない。」

「まア能う御在ますは、お久振に。」

都根子は莞爾笑つて茶の間へ行く。勝彌は強て辭さうともせず、机の上に置いてある自分の原稿に眼を遣りながら、

「原稿は、一應讀んで呉れたかね。」

「いや、未だ其間が無かつたんだよ。君のどもの、僕が讀むまでもないから、直ぐ郵送る積なんだ。」

紫瘦は原稿を封筒に入れ、宛名を書いて、

「小川君、御苦勞だが、鳥渡投函て來て呉れたまへ。」

水鏡は直ぐに家外へ出て行つた。

紫瘦と勝彌が二三雑談を爲し居る中に、都根子はお玉に食卓を運出させ、自分は徳利と焼海苔を持出して、

「鳥渡此で召上つて、頂戴、今何かお下物を見せに遣りますから。」

「奥さん、別に下物の御心配は入らんですよ。」

「御馳走なんか上げませんから、御安心なすつて下さい。」と、笑ひながら、「小川さんは玄



「關ですか。」

「小川は郵書を出しに遣つた。」

「では、玉を遣りませう。」

「奥さん、何卒御心配下らん様に。」

「都根子は笑ひながら茶の間へ行つた。」

「蒼川君、お酌を爲よう。」

勝彌が猪口を出す時、紫瘦は注いで遣つて、自分のにも注いで一口飲んで、疑乎と勝彌を見た。

「君の宅を訪ねて、君の未來の妻君に逢つて來たが、成程美人だね。」

勝彌は苦笑を爲た。

「とにかく、君は結婚するんだらうね。」

「何時かも云つた通り、其は未定さ。」

「未定かも知れないが、併し君の希望は如何なのかね。」

「僕か。僕は美都子が僕に其愛を捧げるなら、何時でも結婚する意だ。」

紫瘦はまた勝彌に酌を爲て遣つて、

「もう、大概分りさうなもんだね。」

「何が。」

「君を愛してるか、さうでないかいさ。」

勝彌は大きく頭を振つて、

「些も分らんね。僕が彼家へ初めて行つた時と、今日と比べて、美都子の僕に對する態度に些の變化も見えんのだ。」

「で、君の態度は。」

「或は變つてるかも知れん。いや、恐らく變つてるだらうと思ふ。」

「ふうん。」と、紫瘦は考へる。

「君、一つ献らう。」

紫瘦が猪口を受けると、勝彌は滿々と注ぐ。



紫瘦は猪口を嘗める様に一口飲んで、

「だけれどもねえ、蒼川君。」

「うむ。」と、勝彌は紫瘦の顔を見る。

「君は僕よりも未だ二三歳若いし、此から大いに發展しよう云ふ人だから云ふんだがね、我々作家が、遺憾なく其主義の爲に盡す事になると、何物をも犠牲に供して願みない覺悟がなきやならないだらう。其點から考へると、僕は今日既に過つて居るのだ。」

「過つて居るとは、何をかね。」

「妻帯した事がさ。」

と云つて紫瘦は茶の間を顧みだが、都根子の姿が火鉢の邊に見えないので、好都合くと胸の中で呟いた。が、誰か知らん都根子の體は唐紙に蔽はれて居ながら、夫の語の一端を聴取つて居ようとは。

「何故、妻帯したのが悪いのかね。」

紫瘦はまた茶の間を見返りながら、

「だって君、僕の思想と妻の思想と一致しない場合があると、先づ假定するのだ——僕の頃日來の作物を妻が喜ばないと假定してだね、或時はまた妻が作物に現はれた人物の性行に就いて、僕に對して誤解する場合があると假定してだね……今日までは無論其様事は無いさ。妻は充分僕を信じてるんだから、無論其様事は無んのだけれども、假にある者とする、自然家庭が圓滿でなくなるだらう。と云つてさ、僕が妻の意を迎へる爲に、今取つてる作風……いや主義なんだ……主義を變たとして見たまへ、忽ち生活問題……いや生活問題なんだ齒牙に掛るにも足んさ。總てを犠牲にして居る僕なんだから、其様事なんぞ問題にもならん話だけれども、家庭の圓滿を缺く場合に立到つたと假定したら如何だらう。妻も不幸なら、僕も不幸だ。僕は妻の爲に囚はれて思ふ通の作物が出来ないし、妻は僕の爲に生活の苦痛を見ることになる。だから、僕は思ふんだね、何物をも犠牲にするほどの覺悟を有つてる作家が、迂濶に妻を娶るのは恐だ、求めて自縛自縛の苦境に陥るんちやアないかと。君、さうは思はないかね。」

勝彌は高く頭を揚げ、天井を仰いで聞いて居たが、見下す様に紫瘦を見て、



「ぢやア、何だね、君の意は僕に美都子を娶るなど云ふんだね。」

「いや、是非さうしたまへと云ふんぢやアないよ。唯、君をして悔なからしめようと思ふ老婆心なんだ。君よろしく三思すべしだね。」

「君の好意は謝する。」

二人の談話を聞いて居た都根子は、夫の真意の測難いのに驚いて居る。前には自分が獨身だつたら結婚したいとまで云つた美都子を、久能木に對つては娶るなかれと云はぬばかりのことを云つて居る。作を爲る主義の上からは、意見や感情の衝突もあらうけれども、兎に角友人として交際して居るのに、聞き様では久能木と美都子の結婚の邪魔を爲る様にも聞えて、夫の品性までも疑はれる様な氣が爲出した。

「蒼川君、だから僕は時々、獨身生活の昔が懐しくなるんだよ。僕の眞實の希望を云へば、放浪生活なんだ。」

瘦紫には得意の色が見える。勝彌は何とも云はぬ。

都根子は凝乎と耳を澄して居る。

勝彌は暫時してから、

「では、君は獨身で居たいんだね。」

「必ずしも然様とは云はない。作家として所有経験を積ふと云ふ側から、人の夫となり父となるのに異議はないけれども……まア何さ、夫と趣味を同じうし心を同じうする妻を得る事が出来れば、同様も亦必ずしも厭はんさね。」

「さうか。併し、君は現に相愛の賢夫人と同棲して居るんだらう。而も、家庭の圓滿を缺て居ると云ふ譯ではなし……君が前に擧げた家庭に處する苦痛なるものは、無論假定しての話なのだから、君が今日放浪生活に入る必要もない筈ぢやないかね。ゴリキーが文名を成す前に放浪したからと云つて、何も其を真似る必要は無いらぬ。ゴリキーは最初から放浪したいと思つて放浪したんぢやない様だ、彼の境遇が其處に到らざるを得なかつたんだ。で、君の今日の境遇は如何なんだ。既に相愛の妻君はあるしさ、地位相應の生活は爲て居るしさ、好んで放浪生活に入る必要は無無論のぢやないか。僕こそ放浪生活に入らうが何を爲やうが、何等負ふ所の責任が無いけれども、君の境遇は僕とは違ふよ。君は既に



大いなる責任を負ふて居るのだから、君が何物をも犠牲に供する、生命も亦何かあらんの意氣は嘉すべしだけれども、相愛の人を忘れてはならないだらう。君が放浪生活に入りたいと云つても、妻君が同意されなかつたら如何する意かね。口に云ふのは易からうが、實行は難いだらう。實行の出来ない事を口にするのは、僕の取らざる所だ。」

勝彌が尙ほ辯じようとしたのを、紫瘦は茶の間を氣にしながら進り、

「唯希望だと云つただけの事なんだよ。」

「希望ばかりにして置かないで、實行なさるが可いよ。」

都根子は斯う云ひながら、二ツの吸物椀を載せた盆を持つて入つて来た。紫瘦はさては

都根子が聞いて居たのかと心中周章しながらも、態と平然たる態を粧うて居た。

都根子は先づ椀を勝彌に進め、次いで夫の前に置きながら、

「私に御遠慮なさる事はありませんから、放浪生活にお入りなさつたら可いでせう。今日から……今からだつて能う御座んすよ。」

紫瘦は態と相手にならない様な風を見せる。勝彌は笑ひながら、

「奥さん、今のは唯の談話なんです。紫瘦君が僕に忠告を與へられた、談話の餘談とも云ふべきで、貴方が御氣にお掛けなさるほどの事ではありませんので。」

都根子は何も云はないで唯淋しい笑を漏らす。

「なに、君の議論に動かされたんだらうね。」

「いゝえ。久能木さんに御被けなさる事はないは。私、所天に動かされましたの。」

「如何して其様事を云ふのかね。」と、紫瘦は深く／＼眉間に皺を寄せて見せる。

「私、今日と云ふ今日、始めて所天の眞實の心が解りましたの。私は所天が作家としてお積なさる経験の道具になつてたんですって、私始めて知りましたの。私は所天が眞實愛して居て下さるんだと思つてたら、さうでなかつたんですは、唯道具に使つてらしたんですはね。私何だつたの、所天の御書きなすつた小説を拜見して、随分だはと思つた事もありましたのよ。だけれども、現實をありの儘に描くんだつて平生云つてらつしやるから、私は全然世間の事を書いてらつしやるんだと思つてましたの。それが然様でなかつた事を、今日と云ふ今日知りましたの。尤も、私の注意も足らなかつたんですね。経験以外の事は書か



ないつて云つてらッしやるんだから、現實をありの儘ッてのは、御自分の事をありのまゝに書いてらッしやッたんだのに、私迂濶他の事だと思つてましたの。久能木さん、私本當に餘程ぼんやりしてますのね。」

都根子は笑顔を作つたが、其眼には涙が溢れさうだ。

都根子は暫時してから語を繼いだが、殆んど自暴になつたらしい語調で、

「所天、今日からでも今からでも能う御座んすから、放浪生活にお入りなさるが可い。私も自儘に放浪する事に爲てよ。所天と御一緒ではなくッてよ。所天は所天、私は私で放浪して見るのも可いでせう。私今日つから、既う貴方の道具では満足が出来ないんですよ。いゝえ、出来るも出来ぬもありませんの。道具が自覺して、放浪生活に入るのも面白いでせうよ。は、は、は、と、高く聲は立てながらも淋しい笑方を爲て、「久能木さん、好い材料ですはねえ。」と、ついで、立つて茶の間へ入る。

紫瘦は勝彌と顔を見合せる苦笑を爲し、

「女は如彼だから困るよ。」と、急に小聲になつて、「妻が、彼様で何が出来るものかね。だ

から、僕は放浪して見たくなるんだ。」

「其様事を云ふのは、君が間違つてる。」と、勝彌は言下に斯く難じて、「妻君の前でだ、僕は何にも云はん意だッたが、君と差向になつたから云ふのだがね、妻君が今見たいな事を云はれるのも、妻君の身になつて考へると無理も無いと思ふ、僕は寧ろ妻君に同情するね。妻君は今日まで、自分を愛して呉れる夫の爲可かればかと思つて居られたらうから、唯君を思ふ一念から君の作物にも、君の言動にも、些の猜疑の念を發されなかつた。君が經驗以外に筆を付けないと云つても、君の品性を尊んで居られたのと、君の作物の世評好かれとばかり翼がつて居られた爲とで、無論君を研究しなぞこの念が發らう筈もなしさ。また、自分が何様に取扱かはれて居るか云ふ事さへも考へられなかつたんだ。其處へ持つて来て、君が先刻見たいな事を云つたもんだから、自分は夫に愛されて居たのではなかつた、作を爲す爲の經驗の道具に使はれて居たんだと、一途に思込まれたのだ。僕は妻君に同情するのが正當だと思ふ。」

紫瘦は爲様事なしに苦笑を爲ながら、



「妻が、君が今云つた様な所まで考へてるか知ら。」

「勿論ぢやアないか。経験に使はれた道具が自覺して、放浪生活に入ると云はれたぢやアないか。」

「さうは云つたけれども、併し。」

「まだ其様事を云つてるから、君は不可よ。君は妻君を其位に思つてるから、今見たいな波瀾も起つて来るんだ。妻君が盲従してた中は其でも濟まうが、一旦自覺された以上は、君も大いに考へなきやアなるまいと思ふ。」

「女は如彼だから可厭だ。」と、紫瘦は吐く。勝彌は覺えず冷笑したが、

「紫瘦君、僕は直言するが、君は果して君が口にしてるほどの信念を以つてるのかね。」紫瘦は怒を含んだ眼に屹度勝彌を見る。

「僕は大きい疑つてるのだ。と云ふのは、君の以前を知つてるからなんだ。以前と云つても、僅かに二三ヶ月前の事だ。君は僕へ斯う云つた事があるよ。僕は今大いに立場に迷つてる。僕の今日まで本領として居た家庭的の作物は歓迎されなくなつて来た、世は自然派の世

となつて来た、僕は如何したものかと思つて迷つてる……君忘れはしまいね。それなのに、今日の君は、其派の急先鋒を以つて任じてる様な事を云つて居る。君が経験以外の事は書かないと云ふのも、放浪生活に入りたいと云ふのも、君の先輩としての某氏の意見を、其儘自分の意見らしく見せてるとしか思へない。」

「怪しからん。」

「怒るなら怒りたまへ、だが、君ばかりぢやない、他にも澤山雷同者があるのだから、君一人を責めるのぢやないけれど、作の爲にあらゆる経験を積みたいから、夫ともなり父ともなる……君はつい口を滑らしたんだらうが、其まで真似るには及ばなかつたらうと、僕は思ふのだ。」

「君、無禮な事を。」

其處について入つて来たのは水鏡だ。

「君、大分長かつた様だね、郵書を投函て来たけにしては。」紫瘦が斯う云ふと、水鏡は意味ありげに微笑を漏して、



「一寸飯田町まで行つたもんですから、遅くなりました。」

「飯田町。」と、紫瘦は其を察しながらも小首を傾げて、「飯田町は誰の處へか。」

水鏡は勝彌の横顔を見上げながら、

「兒玉の下宿です。先生も行らッしやつた事があるでせう、曾て久能木先生が下宿してお居でなかつた山田に、兒玉を訪ねたんです。」

「どうか。君、一杯如何だ。」と、猪口をさす。

「頂戴します。」

水鏡が受けた猪口に、紫瘦が酌を爲ようとすると、たら〜と四五滴滴つたばかりで、徳利には酒が盡きて居た。

「これは失敬した。君、彼方へ行つて、熱燗やつを持って来て呉たまへ。」

水鏡は茶の間へ行き、銅壺から抽出したまゝの湯氣のたつて居る徳利を持って来たが、何だか不安な顔を爲ながら、紫瘦を見ては茶の間を見返る。紫瘦は苦笑を爲ながら、

「此方に貸したまへ。」と、徳利を取り、「蒼川君、熱燗のを如何だね。」

勝彌が猪口を出すと、紫瘦は其に酌を爲て、後で水鏡に酌を爲て遣り、

「兒玉氏は居たかね。」

「居ましたから話して遣ました。」

紫瘦はぎよッとしたが素知らん風で、

「話して遣つたッて、何かね。」

「え、なに、いゝえ、僕の方の其の……先生は御存知ない事です。」と、覺えず汗をかいたらしい。

「何か秘密な事だと見えるね。君の秘密を強て聞かうとは云はんから、安心したまへ。」と、紫瘦は能く高く笑つて見せた。

水鏡は猪口を紫瘦へ酬しながら顔を見合せて、ほッ息を吐く。

勝彌は水鏡を顧みて、

「兒玉氏には久しく會はないが、相變らず病院へ通つてゐるかね。」

「然様です。先生が御居になつてゐる事を話したら、宜く申して呉れと云つてまし



た。

『さうかね。君今度あつたら、僕が宜く云つたと傳へて呉れたまへ。』

『承知しました。』と、答へながら、にやりと笑つて、『久能木先生、尙だ他にも宜くと云つた人があります。』

『彼家のお須壽だらう。』

『え、然様です、久能木さんへ宜しく申して下さいと云ひましてね、それからまた、えへ、富士見町と飯田町とは、其様に距れてるつて云ふ程でもありませんから、御序にお寄りなすつたつて可いでせうつて、懐しがつたり怨んだりして居ました。』

『彼も妙な女だね。』

『ですがね、先生が彼家をお去りなさつてからと云ふものは、可愛さうの様にほんやりしてるつて、兒玉が云つてました。』

『兒玉氏と君との談柄には、其様事が適してるだらうが、僕は聞きたくない。紫瘦君、君とは種々話したい事があるけれども、小川氏の前で眞面目の談話も出来んし、興も亦盡きた。

近日また訪ねよう。君も亦些と出掛けたまへ。失敬する。』

紫瘦が止めたけれども、勝彌ははや玄關へ出て行く。都根子も紫瘦や水鏡と共に送つて出て、

『久能木さん、今度入來つしやる時美都子さんをお伴れなさいまし。私も何れ伺ひますか。』

『紫瘦君と御一緒に、何卒遊に來て下さい。』

『柏木さんへも宜しく願いますよ。』

『は。』

勝彌が辭し去ると、都根子は夫の顔も水鏡の顔も見たくない様な風を爲て、茶の間へ入つて了ふ。

(一九)

柏木の茶の間では、今しも争論の眞最中である。



長火鉢を間城にして、一方には千代乃に身を寄せて、長夫が半分べそをかきながら怒の眼を据ゑて居ると、他方には重勝とお瀧が膝を駢べて、其間の猫板を前にして居る元二は長夫に對つて眼を光らして居る。美都子のみは鐵三を懐いて、座敷の床の天竺葵に對しながら、折々氣遣しさうに茶の間を見返るのであつた。

暫時の間双方睨み合つて居たが、元二の義經眉がびり、動く。

「阿母さん、それッばかりの金額で、争たッて満らないぢやアないかね。叔父さんが欲しいと云ふんだから、遣ッ丁ふが可いんだ。」

お瀧は伏目になつて居たが、太息を吐くと共に首肯いて、確と結へて來た胴巻を懐手爲て解きながら重勝を見返り、

「所天、池田に會はない昔と諦めて了へば、何でもありませんから、元二がお云ひ通此二百圓は長夫さんへ遣る事に爲すつて下さいよ。能う御在ますでせうね。」と、胴巻をぐるぐると巻いて猫板の上に置く。

重勝は唇を噛んで、千代乃の顔を屹度見て居る。

「長夫さん、其胴巻に二百圓入つてるんだから、一應改めて受取つて下さい。」

斯うなると、長夫も有樂に手を出し得ないで、千代乃が何と云ふかと其顔を見る。元二も祖母の顔を凝視めて拳を握つて居る。

千代乃は其の吸殻を火鉢の縁でとんとはたいて、徐かに口を開いた。

「お瀧も重勝も、私の云つた事を如何お聞きなのかい。私は其御金を、悉皆長夫へお遣りなさいとは云はない意だよ。半額だけは返して遣つてお呉れでないと、私が第一長夫に義理を缺く事になるから、何卒さうしてお呉れと云つた意なんだよ。それなのに、胴巻ごとお出しなのは、二人とも如何思つてお居るか、私にはお前さん達の意中が解らないのだよ。」

重勝は眼を外し、お瀧は伏目になつて、二人とも何とも云はぬ。

元二は祖母の顔を尙ほ暫時見て居たが、火鉢を推すまで膝を進めて、

「叔父さんへ悉皆遣るが可いと云つたのは、僕なんです。池田から貸した金が残らず取れたのなら、半額にしても四百圓からになるんですから、其金で生活の方法が如何にか立てられるけれども、二百圓を二ツに裂いた日には僅た百圓なんだから、如何しようにも方法が無



いんですから、叔父さんに今少時の間待つて貰ふ譯には行かないでせうか。此二百圓を資本にして、何か商賣を始め、其内には屹度叔父さんに返すからッて、父さんも母さんも云てるんでせう。それが不可きやア、寧ろ此二百圓を悉皆叔父さんに遣つ丁ふが可いと思ふから、僕が然様なさいて云つたんです。」と、長夫に對ひ「叔父さん、こうしたら不平はないんでせう。」

「誰が不平だと云つた。」と、長夫は此小僧と云はんばかりの語調で、「乃公は百圓ありや、母さんと美都子と三人で、もどく通別に家を持つ意なんだ。それでなきやア、強て返して貰はうと云やアしない。」

「何ですッて、別に家を持つんですッて。」と、元二は鼻頭で笑つて、「一月持てりやア大出来だ。」

「何だ。」

「百圓の金で、二月家が持つてけりやア大出来だと云つたんです。」

「誰に云ふ語だ。」

「叔父さんにだ。」

「小僧の癖に何を云ふ。」

「小僧とは何だ。」

二人は互に拳を握つた。

「元二何ですよ。叔父さんに其様真似を爲て、失禮ですよ。」と、お瀧は千代乃の顔色を窺ひながら云ふ。

「だッて、僕の云ふ通なんだ。百圓の金を持つて別になつたッて、一月と續かないに極つてるんだ。此前に別れてた時だッて然様ぢやないか。銀行の月給は、五十錢銀貨一枚だッて御祖母さんに渡した事が無つた癖に、御祖母さまを強請ッちや小遣を持つてつたんぢやないか。百圓位の金は、一月経たない中に、小遣だとか辨當代とか、つまらない物を買散かしたりして、無くなッ丁ふに極つてるんだ。」

「遣ッ丁やア如何だと云ふんだ。其百圓だッて、姉さんや義兄さんから貰ふんぢやないんだぞ。取替へといた金を返して貰ふんだ。もどく乃公の金を乃公が費ふんだ。お前見たい



な小僧に懇圖／＼云はれる譯は無いらぬ。一月續かうか續くまひが、大きに御世話だ。」と、長夫は姉夫婦に貸金があると云ふ強身で、齒にかゝつて罵り返す。

「さうですとも、長夫さんのお云ひの通ですよ。元二なぞが、叔父さんの世話を焼けよう等が無いし、また焼くべきでもないんですから、何卒氣に掛けて下さらない様にね。」と、お瀧は平素よりは語も丁寧で、「ですからね長夫さん、此二百圓は、胸巻ぐるみお前さんへお返しするから、別に家をお持の足にでも、またお前さんの小遣にでも、自由に使つてお呉れが可いんですよ。」

「其なら文句は無いだらう。人を小僧だなんて失敬だ。」

また競掛らうとする元二を、お瀧は制して、

「お前は何にも云はないで下さい。お前が何か云つてお呉れたとね、母さんは氣が斯う、何と云つて可いか、妙な氣になるからね、もう何にも云はないで座敷へ行つて、お呉れ。」

元二はふいと立つて座敷へ行つて了ふ、

千代乃が胸巻ごと取れと云つたら取る意で、長夫は頻りに其顔を見るけれども、何とも

云はないで無間斷に煙草を吸つて居る。重勝は唯眼を光らして居るのみで、お瀧は眼を火鉢の中に落して、折々幽に太息を吐く。

格子戸が開くと、はや聞こえるのは勝彌の聲だ。

「元二君はお歸りでしたか。」

「歸つてます。」

元二は高聲に答へながら玄關へ行く。其後から美都子も出迎へる。

「僕も、君が去つた後で、紫瘦の宅へ行つたんだよ。」

「さうでしたか。紫瘦さんはお留守だと云ふ事でした。」

「君が訪ねた時は然様だつてね。僕が行つた時は、歸宅つて居たッけ。」と、勝彌は美都子に對ひ、「私の留守に太田が来たさうですね。」

「はい、入來ッしやいました。」

勝彌は熱く美都子の顔を見て、眉を蹙せながら、

「美都子さん、顔の色が善くないが、氣分でも悪いんですか。」



「さへ。」

美都子は下を向きさま、笑顔を作ったけれども、勝彌は今日まで美都子が此様に淋しい笑顔を爲した事が無いので、酷く氣掛りで、

「元二君、君小言でも云やアしないかい。」

「其様事は無いんです。」

勝彌は今始めて氣が着いたが、元二も何だか不樂しい顔を爲て居る。

「君も如何かしやアしないか。」

「なに、何でも無いんです。」と、苦笑を爲る。

勝彌が座敷へ入ると、先づ眼に附いたのは床の天竺葵で、目覺る様に美しい感がある。けれども、何と云ふ事はなしに家内が淋しい様に思はれる。茶の間にも人氣が無い様だ。

「如何したんだらう。御祖母さんも留守知ら。」と、思ひながら、茶の間を差覗くと、千代乃を始め四人が睨合つて居た。

勝彌は何か事が起つて居るとは察したけれども、其事が何であるかは知らう筈もないので、悪いところを覗いたッけ、寧ろ知らない風を爲て、元二と美都子と談話でも爲て居た方が可かつた。と思つたけれども、何も云はないで引込む譯に行かなくなつた。

「唯今歸りました。」と、云つた時は、既に座敷を見返つて居て、直に二三歩退いた。

「御歸りでしたか。」と、直ぐに應じたのは千代乃。

「美都ちゃん、先生の御火鉢を見てお上げなさいよ、お火が無かつたかも知れないから。」と、お瀧が氣を付ける。

重勝と長夫は尙ほ睨合つて居て何とも云はぬ。

「火は澤山ある。」と、元二の聲には未だ怒氣が消え切らないらしい。

勝彌は美都子の美しい顔に霧れやらぬ雲霧の漂うて居る仔細が知れると、何も知らぬ無邪氣な麗はしい人が、此様事で心を傷めて居るか可哀相でならぬ。

「美都子さん、」と、床の天竺葵を見返つて、「人もですね、此花の様に思ふまゝ美しい色に咲いて、それで無心で居る事が出来たら、幸福だと思ひますね。だから、僕はさう思ふんで



すよ、満らない事か何かの爲に、氣が鬱する様な事があつたら、此美しい花を見て、花の無心なところに同化して了つて、何にも考へないで居る事にする。貴女も以來、さう云ふ事にしちやア如何です。』

「はい。』と、美都子は自分の顔色を見て慰めて下さるのだと思ふと、嬉しくもあるけれども亦羞かしくもあり、鐵三の顔を見る風を爲て垂頭いた。

「元二君、君も然様したまへ。君も美都子さんと一緒に、草花の培養でも爲たまへ。僕もさう爲て見たいと思つてるんだよ。』

「はら。』とは云つたけれども、元二は尙ほ茶の間のいきさつが如何になり行くかと、氣掛らしく、見返り見返りして居る。

美都子の膝の上の鐵三が夢に醒はれたらしく、俄然に泣出す。

「あ、如何お爲なの。好兒だね、好兒だね。』

美都子が慰しても尙ほ泣止まないのので、茶の間のお瀧が、

「美都ちゃん、連れて来てお呉れ。』

「はい……鐵ちゃん、好兒ね、好兒だ。』と、顔で慰したり、春を擦つたりしながら、茶の間へ連れて行つた。

勝彌は小聲で、

「元二君、美都子さんが居たから黙つて居たが、内の人達は如何かされたんぢやアないかい。』

「えへ。』と、生返事を爲る。

「家庭の不和合と云ふ奴は、實に人の心を傷しむるものだ。僕も一緒に住んでる以上は、共に痛心しない譯には行かない。別けて、君や美都子さんの顔に暈が見えると、僕も何か重い物でも戴いてる様で不愉快だ。僕には何の力もないけれども、君が打明けて相談を爲て呉れるんなら、出来るだけの手段を盡して見たいと思ふんだよ。君、話して呉れる事が出来るかね。』

元二は尙ほ消えざる怒氣の爲に、平生は櫻を吉野紙に包んだ様な麗はしい顔色に、何となく蒼味を帯びて居たが、勝彌の話を聞くと俄かに充血くなつて、而も眼に潤を有ち、何か



云ひたげに唇を動かしながらも尙ほ躊躇つて居ると、茶の間から此方へ来る足音が聞こえて、聽て入つて来たのは美都子かと思ひの外お瀧で顔に愛想よき笑を含みながら勝彌に向つて坐つた。其膝には鐵三が右の乳を飲みながら、左の乳房を紅葉の様な可愛らしい手で、ぴちや／＼打いて居る。

「美都ちゃんや。」と、お瀧は美都子を呼んで、「先生に未だお茶をお上げでないでせう。」

「あ、左様でした。」と、美都子はきまりの悪い顔を爲て茶の間へ行く。

茶の間から重勝の聲で、

「お瀧、お前が行つて了つちや困るぢやないか。此處に来て、始末を着けて了ふが可い。」

「私が居たつて爲様がありませんよ。所天と長夫さんとで宜く願ひますよ。」

「姉さん、其様事を云つて居られちや困りますア。此處に来て、話を着けて戴かうぢやありませんか。」と、ぎす／＼した語調は長夫だ。

「もう相談は落着たんでせう。お前さんのお云ひの通に爲るより詮方が無いから、さう爲

てるんぢやアありませんか。其上には如何にも出来ないんですよ。無い袖を振らうたつて振れないものは詮様が無いでせう。」

「お瀧、兎に角来てお呉れが可いよ。」

千代乃が斯う聲を掛けると、お瀧も母の命には背をかねて、鐵三を揺上ながら立たうとして、

「元二や、先生にお聞かせ申すのはお羞かしいけれど、様子でも大概察して居らつしやるでせうから、お前から事情をお話し申してお呉れよ。貴方、失禮致します。」

お瀧が茶の間へ行くと、聽て座敷では能く聞取れないほどの聲音で、談話が始まつたらし。

「元二君、何が紛紜が起つてる様だが、何様事かね。」

「僕はお話するのは厭ですけれども……。」

元二は暫時躊躇つて居たが、其語るところに依ると、池田と云ふ男へ貸金の八百圓を、今日父と母と二人談判に行つて、結局二百圓で證文を巻く事にして、二百圓は現金で受取



つて歸つて來ると、其からが此紛紜である。父や母の希望は、貸流になつた積の金が僥倖にも手に入つたから、之を資本に商賣なり何なり爲る事にして、多少生活の不足を補ひたいのであるが、祖母と叔父とは其二百圓の半額を、曾て取替へて置た内金として返して貰ひたいと云ふのである。叔父の方にも無論道理はあるけれども、二百圓でも資本としては不十分であるのに、其半額では何を爲る事も出来ないから、今暫時のところ猶豫して貰ひたいと頼んだのである。けれども、叔父は何でも百圓だけ返せと云ふ。で、自分は何せ資本にも足ぬ金なら、未練氣なく二百圓を叔父へ遣るが可いと思つたから、母へさうせよと云ふと母も同意して、其金を長夫の前へ差出したまゝで、先刻から睨合つて居たのだと云ふのである。

勝彌は聞了つて暫時考へて居たが、

「長夫君は強て金を返して貰つて、其を如何しようと思ふのかね。」

「それは何です。其金で別に家を持つて、御祖母さんと美都子さんを連れて別れようと思ふんです。」

「御祖母さんと美都子さんを連れてかね。」

「さうです。」

勝彌は意外の感に勝へない。長夫が母たる千代乃を伴ふのは當然であるが、美都子も共にとは案外である。美都子は乃公に保護を托してあるのではないか、妻に貰つて呉れと云つたのではないか。それにも關らず、長夫が伴ひ去らうと云ふのは如何にも心外である。祖母が孫を愛する餘り、孫が祖母を慕ふ餘りに、一緒に居たいと云ふ希望とあれば止むを得ないけれども、それにしても一應は乃公に相談するのが順序だ。況て、長夫が自儘に伴ひ行かうなぞとは、事理を解せざるも亦甚だしい。千代乃にしても元二にしても、一旦美都子を乃公に托して置きながら、長夫の爲すまゝに委せる意で居るのか。萬一然様であるとすれば、乃公も大いに考へねばならぬ。と、不快の念は勝へ難いまで胸に迫つて來たのである。

「元二君、御祖母さんも美都子さんも、長夫君の家の人かね。」

勝彌の語調が如何にも嚴しかつたので、元二は驚きながら其顔を見ると、疑乎と自分を見据ゑて居る眼が眩しい様だ。で、やゝ周章しながら、



「其様事は無いんです。其は其の何です、以前に別家になつて居た時に、御祖母さんが彼方へ行つて居たものですから、其時分は未だ美都子も幼少かつたし、御祖母さんが淋しいからと云ふんで、傍に置いてたんですよ。叔父は其時の事を思つてるもんだから、依然其意で彼様事を云つたんでせう。ですけども、僕が其様事をさせやアしません。御祖母さんだつて爲せやしないでせう、美都子だつて叔父の方へ行きたがる筈が無いんですから、縦んば叔父が無理にも然様したいと云つたつて、出来る話ぢやアないんです。それに何ですからねえ、御祖母さんだつて叔父と別居するのは懲りてるんですから、今度は一緒にならうたア云はないでせうよ。彼叔父に一家を維持する能力なんぞあるもんですか。御祖母さんだつて、其位な事は知つてるんですから、大丈夫ですよ。」

勝彌は此際元二の口から第一に聞きたかつたのは、美都子は貴方に保護を願つてあるんですから、叔父の方へ遣す筈がありませんと云語だ。他の事情は事情として、自分に對して此だけの事は、元二の口から云はねばならぬ。然るに其を云はぬとは、あるへからざる事ではないかと思ふと、不快の念は些も去らぬ。寧ろ其事を云出して、元二を責めて遣らうかとも思ひながら其顔を見ると、伏目になつて居る様子が、如何にも恐縮して居るかの様で、其美しい面は限なき憂愁の色に閉され、忍びながら吐く太息にも、其胸中の苦悶が想像される。と、責めようと思つた心も弱つて、そらる氣の毒になつて来る。元二も乃公に對して云はねばならぬ事があるとは知りながらも、其を云ふのでさへ辛くて黙つて居るのかも知れぬ。元二は邪氣のある男でない、口と心に裏表のある男でない、ありのまゝの男だ、尠くとも乃公に對しては然様より思へぬ。其を思ふと責めるのは可哀相だ。今責めなくとも、靜かに成行を見て居れば解る事だ。乃公が何時までも不快な顔を爲て居れば、弟の様に可愛い元二に何時までも物を思はせるので、如何にも氣の毒でならぬ。暫時の間でも、此人を苦しめるのではなかつたと思返して、平素に異らぬ心を持たうと勉める内に、胸を塞いで居た不快の念が漸次消去る様だ。

「先生、何卒悪く思つて下さらない様に願ひます。」

「なに、心配したまふな。」

茶の間にはお瀧の聲が突如に高まつて、



「……何時まで同一事を云つてたつて仕様が無いから、長夫さん、お前さんの意志通りにお爲が可いぞ。」

「お前は直ちに然様お云ひだけれども、其では事をお破りの様なものだよ。」と云つたのは千代乃である。

「だつて、詮方が無いぢやありませんか。」

「其處が相談ぢやアないかね。」

「母さまは然様仰有るんですがね、私の方では、長夫さんの好きにお爲なさいと云つてるんでせう。二言目には以前の事が出るんですが、私達だつて、何も損を爲様と思つて商法を爲たのぢやありませんよ。如何かして、些少でも財産を殖したいと思つて爲た事なんです。其が手違にばかしなつたもんですから……それと云ふのも、意氣地が無いからなんです。所天、所天も此處は耐忍を爲て頂戴よ。なに、また好い正月が來ないとも限らないんですから、もう何にも思はないで下さいよ。」

お瀧は漸次泣聲になつたのである。

「あゝ困るねえ、お前達が我意ばかりお張りでは。」

千代乃は斯う云ふと、聽て座敷へ來ながら、

「美都子や、私の蓑盆を持つて來てお呉れよ。」と、坐つて、「先生、満らない事をお聞かせ申しますのね。」と、淋しい笑顔を爲る。

「元二、先生へ御話をお爲でしたかえ。」

千代乃が問ふと元二は下を向いたまゝ眉を顰せながら、

「えへ、御話爲たんです。」

「さうかい。」と、美都子が持つて來た蓑盆を引寄せ、煙管に蓑を塞めながら、「先生、元二からお聞きの通で御在ましてね、間に介つてる私が、一人で困りますのですよ。貴方に此様御相談を願つちや濟まないの御在ますが、何とか好い御工夫は御有りなさいませんでせうか。」

「はい。」と、勝彌は暫時考へて居たが、「それで何ですか、御祖母さまは如何なさる御意なんでしょうか。長夫君が希望される通り、御祖母さまは美都子さんをお連れなさつて、元二君



の御両親方と別にお成りなさる御意なんですか。」

「いえ、其様事はありません。彼人には既う懲りてますから、嫁でも持たせてからなら兎も角もですが、今一緒になんぞなりたいとは思ひません。私でさへ然様で御座いますから、美都子を彼人へ預けるなんて事が出来ませんものかね。」

「さうですか。」と、勝彌はますます胸が開けた様な気がしながら、「それで何ですか、御祖母さまは如何なさうかと云ふんですか。」

「私が如何しますと申しますのは」と、合點が行きかねた體である。

「いや、私の申し様が悪かつた様です。元二君の御両親と長夫君との衝突ですね、其調停に就ての御意見を伺ひたいと思ふのです。」

「其事で御座いますか。それには私も當惑致すので御座いますよ。ですから、御迷惑でも御力を貸して戴きたいので御座いますよ。」

「さうですなア。」と、勝彌にも如何しようとの策が差當つて浮ひかねるので、擬乎と考へて居る。

「私は斯うも思つてますけれど……。」

千代乃が語出した意見に依ると、長夫へは義理としても半額は返して遣らねばならぬ。それも長夫に家を持つ爲の費用にはさせず、銀行へ預らせて、萬一の時の準備にさせたいのである。殘剩の百圓では商法の資本には不足であらうが、重勝夫婦の商法にも、自分は既う幾度となく懲りて居るから、ならう事なら商法には手を出して貰ひたくない。やはり長夫の分同様銀行へでも預けさせて置いて、緩急の用に供させたい。貸流になつた意で居た金であるから、返つて來なかつた昔と諦めれば其迄であるし、夫婦も長夫も其氣になつて呉れれば可いのですが、互に云集つて譲らないから困りますと云ふのである。

「……私は然様思ふので御座いますが、先生に好い御考案が御有なさいますなら。」

「いえ、僕は貴方の御意見に賛成します。其を皆さんが御承知なさらないんですか。」

「お瀧も長夫も、其では満らないと申しますのですよ。」

「それは御二人が御無理です。」

勝彌は暫時考へて居たが、



「御祖母さま、僕が長夫君にお相談して見ませうか。」

「何卒ねえ。」

「元二君、叔父さんに此處へお入來を願つて呉れたまへ……いや、僕からの方が可いだらう。」

勝彌が茶の間へ行つて見ると、重勝夫婦と長夫とが火鉢を隔て、尙ほ睨合つて居た。

「長夫君、失敬ですが、一寸彼方へ来て下さらんでせうか。」

「僕にですか。」と、長夫は不快な眼を爲て勝彌を見上げる。

「些し御相談を願ひたい事があるのですが。」

「まわりませう。」

長夫は勝彌の後に尾いて座敷へ来て、千代乃と膝を駢べて坐つた。

長夫が坐ると、元二は茶の間へ行つて了ふ。

勝彌が考へて居て口を開かないので、長夫はもどかしくなつて膝を進めながら、

「久能木さん、御相談と云ふのは何様事です。」

勝彌は先づ千代乃を見返つて、次いで長夫の顔を見透しもあるかの様に凝乎と見て、

「僕が此様事を云ふのは、如何にも差出がましい様ですが、御祖母さまの御依頼を受けたものですから、御相談を致したいと思ふのですが……外の事でも無いのです。御姉さんや御義兄さんと御争ひの一條ですがなア。」と、また凝乎と見ながら、「御祖母さまの御意見が、最も名案だと思ふのですが、」

「母さんの意見は如何云ふのです。」

勝彌は二百圓を長夫と其義兄夫婦との間に折半し、各自銀行に托し置きて、他日の用に供しようと思ふのである事を話して、

「……僕は此外に名案はなからうと思ふのです。君も母さまの御心を休めると云ふ事に重を置いて、其御意見に従はれては如何です。君が然様爲て下されば、御姉さんの方は、元二君と僕とで、無理にも御同意を願ふ意ですが、君然様して下さらんでですか。」

「ですがね、僕は既に飽きちやしたんだ。」と、長夫は投出した様に云ふ。

「何にですか。」



「此無趣味な生活にでさア。」と、空噓く。

「では、如何爲ようと云ふんですか。」

「母と美都子と、僕と三人で、別に家を持つんです。」

「其は行はれないでせう。」

「え如何して。」と、躍起となる。

「でも、御母さんが御不同意なんです。」

「母さんがですか。母さん。」と、千代乃の方へ膝を押向けて、「僕と別に家を持つのは厭な  
んですか。」

「さやうさ。お前に嫁でも出来た上でならだけれども、今は御免だね。」と、千代乃は落付  
いて居る。

「何故其様事を云ふんです。」

「だつて、百圓のお金が盡きた曉には、餓死を爲る外ありませんもの。」と、俄かに屹とし  
た語調で、「お前の月給は小遣にも足りないし、餓死するのは眼に見えてますよ。」

「別になれば、小遣なんぞ遣やアしませんせ。毎月ちゃんど持つて歸つて、母さんに預けて  
生活費に。」

「其が御出来なら、私は此までだつて心配しやアしないよ。」

「だつて、面白く無いから自棄になつて、つい濫費ツ了ったんだけれども、今度別になれ  
ば、」

「いゝえ、其は虚言ですよ。お前さんが銀行へ勤務める様にお成りだつたのは、さうねえ、  
一昨々年なんぞせう。それなのに、一月だつて月給を持ってお歸りだつた事がありますか。  
此家に一緒に居る前から其なんだもの、今度別になつたつて同一ですよ……いゝえ、私には  
然様としみや思入ません。」と、ギョッぱりと云つて、長夫の語を信じようとはせぬ。

「ぢやア、何ですか。母さんは僕一人如何でも爲ろつて云ふんですね……僕を見捨て了つ  
たんですね。」

「お前さんは何を云ひかい。私がお前さんを見捨てたつてかい。」と、涙合んで、「見捨てる  
位なら、お満と顔を親め合つてまでお前を庇護は爲ませんよ。」



「だって、他人の前で僕の店卸を爲ないだつて可いんだ。可いや、僕は僕で成る様に成つ丁や可いや。」

長夫はふいと立つ。

「長夫。」

千代乃が呼掛けても、長夫は耳にも入れないで、茶の間へ駈込んで、帽子を取るより早く家外へ出て行く。

「長夫君。」

勝彌が呼止めたけれども返辭は聞こえず、手荒く格子戸を開放して、門の耳門を開けて閉めた音がすると、二三人の若い女の笑ふ様な聲がしたのは、隣の娘と其友達の娘等が門内に集つて居るのらしい。

(110)

紫渡の書齋と、玄關の水鏡の机の上には洋燈に火が點されたけれども、茶の間には置洋燈

の置かれたままで、都根子は火を點ける氣にもならぬのか、火鉢の猫板に片臂を突いて片頬を支せながら凝然と考へて居る。

辛と臺所で後仕舞を済まして茶の間へ入らうとしたお玉は、つねになく眞暗なので入りかねて躊躇ひながら、

「奥さま、居らっしゃるんで御在ますか。」

「居ますよ。何か用なの。」

「いゝえ。ですけども、お燈火をお點けなさらないので御在ますか。」

都根子は黙つて居る。

「何だか氣味が悪う御在ますは。點けまして宜しいので御在ませう。」

「放擲らかしといってお呉れ。私斯して考へて居たいのよ。」

「此様に眞暗にして居らっしゃって御在ますか。」

都根子はまた黙つて居る。お玉も詮方が無いので黙つて居ると、暫時してから、

「玉、お前宿へ行つて來たいて云つてたッけね。今夜は好鹽梅に用がないからね、行つて



来たら可いだらうよ。」

「然様で御在ますか。」

「明日になると、又遣れないかも知れないから、お前さへ可きやア、今夜行つてお居で可  
らうよ。」

「おぞ願ひませうか知り。」

「おじぎ爲。」

「では、お願ひ申します。」

「だけども、餘り遅くならない様に頼むよ。」

「はい。大急で行つてまゐります。」

「それは何にお爲でなくッても可いは、深更さへならなやア。」

「では行つてまゐります。」

聽てお玉は宿へと出て行つた。後は書齋で時々煙管で火鉢の縁を打つ音と、玄關で墨を  
磨る音がするだけで、森として居る。

暫時して、書齋で續さまに煙管を打つ音が爲たかと思ふと、紫瘦が掌を鼓した。

茶の間に返辭が無いので、玄關の水鏡が高く答へながら急いで書齋へ行き、唐紙を開て  
膝を突いて、

「御用ですか。」

「あ、君が来たのか。茶が欲いんだがね。」

「はい。」

水鏡は茶の間に入らうとしたが、眞暗なのに驚き、急ぎ玄關から洋燈を持つて来て見て、  
また驚いた。誰も居ないかと思へば、都根子が火鉢に頬杖を突いたまゝ、何處を見るときも  
なく凝乎と見詰めて居るのである。

「奥さん。」と呼掛けても返辭を爲ないので、洋燈を手に爲たまゝ坐つて頭を掻きながら、

「お湯が沸いて居るでせうか。先生がお茶が欲しいと仰有るんですが。」

都根子は見も返らないで、

「湯も無きやア、火も無いんです。」



「あ、火も無んですか。」と、凝乎と顔を見て、「火が無くツちや御寒いでせう。玄關の火を  
持つて来て、熾しませうか。」

「い、え、澤山よ。」

「ですが、先生が御茶が御欲しいさうです。」

「彼方には火も湯もある筈よ。」

「かも知れませんが、先生が、」

「煩擾いは。」

水鏡は夕方からの都根子の機嫌の悪いのを知つて居るので、一喝されて顔上げて、洋燈  
を持つたまま、紫瘦の居室へ逃げて来て、

「奥さん處には、火も湯も無いと仰有るんです。」

「え、火も無いッて。」と、紫瘦は先よりの二人の問答を聞いて居ながら驚いた顔を爲す。

「火鉢の火ばかりぢやないんです。洋燈の火も點けてお居でなさんだんです。」

「さうかい。よろしい。君は彼方へ行つて呉れたまへ。」

「お茶はもう御宜しいんですか。」

「あ、可いから行つて呉れたまへ。」

紫瘦は水鏡を玄關に退かせて、頭を掻きながら考へて居る。

「都根さん……都根さん。」

紫瘦が二聲まで呼んだだけでも、茶の間の都根子は返辭を爲ぬ。

「都根さん。」

また一聲呼んだだけでも返辭が無いので、紫瘦は机を離れて茶の間の唐紙を開けると、  
成ほど水鏡が告げた様に、洋燈も點けてなければ、火鉢にも火の氣が無いのか、其在所さ  
へ見分られぬ。

「都根さん。」

「私をお呼びなすつたんですか。」と、眞暗な中から氣の無い聲が爲る。

「さうさ、お前を呼んで居るのさ。」

「さうでしたか。」



「先刻から幾度も呼んだのが、聞えないのかね。」

「さうでしたか。考事を爲て居ましたから、聞えなかつたんでせうよ。」

「まア其は可い。」と、都根子だと思ふ暗所の一ヶ所に眼を据ゑながら、

「何故燈火を點けないのかね。」

「淋しい心になつて考へて居たいからですは。」

紫瘦は暫時黙つて居たが、

「火鉢にも火が無いさうだが、寒いだらうのに、風邪を引いたら如何するかね。」

「寒いか、暖いか、私感覚がありませんの。感位位の惱が何でせう。私今、もつとく大きな惱に苦しんでますは。」

「大きな惱に苦しんでる。」と、眼を睜つたが、直に苦笑を爲て「都根さん、お前に聞きた

い事があるから、彼方へ来て呉れないかね。」

「来いと云なさればまゐりますは。」

「ぢやア、来て下さい。私も話したい事があるんだよ。」

紫瘦が机の前に坐つてから四五分も過つたかと思はれる頃、都根子は力の無い足取で入つて来て、べたりと膝を平たく坐つて、洋燈の火を眩さうに見ると直ぐ垂頭いた。驚か

るゝまで血の氣失せた蒼白い頬に、亂るゝに委せた廂髪のはつれが被つて居る。

紫瘦は口を結んで徐かに太息を漏し、

「都根さん、お前は晝間私が久能木を調戲つた語を誤解して、彼時から私が彼様に辯解し

たけれども、未だ意が解けないんだと見えるね。」

「さうです。私が誤解して居るんですか如何ですか、能く考へて見て居ますの。」と、やは

り垂頭いたまゝだ。

「そりや考へるのも可いさ。けれども、私が久能木に云つたのは、久能木が後悔する事な

んぞの無い様にと思ふ老婆心からなんだよ。久能木が無性に美都子を受して居るから——云

はば無分別の戀なんだ。」

「其様事はありませんでせう。」

「お前は久能木を信じ過ぎて居るから、然様云ふけれども、戀は盲目だ。久能木だつて彼様に



熱中してゐるんだもの、静かに自分を省るなんて事は到底も出来やせんさ。だから、私が老婆心から、」

「それは其で能う御在ますは。所天が久能木さんの爲を思つてお云ひなすつたと仰有るのも、それに爲て置いて、それでも私誤解ぢやないと思ひますは。」

「如何してかね。」

「尠くも所天御自身の事を仰有つただけは、私決して誤解してゐるんぢやないと思ひますの。」

「其が誤解なんだよ。先刻も彼様に辯解したんだから、もう解つてさうなもんだね。」

「いゝえ、解りません。考へれば考へるほど解りませんのです。」

「お前にも困つて了ふ。」

紫瘦は忙しなさうに煙管に煙を塞める。都根子は疑乎と其顔を見て居る。

紫瘦は煙管を火鉢にはたいて、態と軽い語調で、

「都根さん、夫婦の間ぢやアないか、何時迄も不快に思つてないで、打解けて呉れちや

如何だね。お前が其様に氣に掛けるなら、晝間の話は——久能木に云つた語の總てを取消す事にするから、何卒心持を直してお呉れでないか。」

「御取消しなさらないだつて可いませう。所天が今取消すと仰有つたつて、一旦口からお出したすつた語が、元へ返りもしないでせうし、私の心に今でも響いてる所天の御語が、消えるものではないんですからねえ。」

都根子は斯う云つて、俯けた頭を稍斜に、眼を障子の棧に見据ゑて、重ねた手の指を組んだり解したりして居る。

「取消しても不可と云ふんだね。」と、眉根に深く八字を刻んで、「お前も餘り執念深い。僕が謝罪れば好いのかね。」

「いゝえ、謝罪つて戴く事はありませんは。所天は所天の信じてらッしやる通を仰有つたんでせうから、御謝罪なさる事はない筈ですは。」

「ぢや、如何すれば可いんだね。」

「如何も爲て戴かなくなつたッて可いんです。」



「困るね、其様事を云つてちや。」「ど、ほどく續ぐべき語を見出せずに居たが、ほつと太息を吐いて、」「ちや、お前は如何しようを云ふのかね。」「

「其事を先刻から考へて居たんです。」「ど、暫時黙つてたが、今夜にも如何にか爲ろつて仰有るのなら、生家へ歸つても宜しいんです。」「

「お前は何を云ふのか。私の云ふ事を何も其様に、一々誤解しなくも可いだらうかね。」「

「また、私の誤解だと仰有るんですか。」「

「誤解だらうぢやアないか。私の云ふ事を私が思ひもしない方に解された日には、何も云ふ事が出来なくなるよ。」「

「でも、お前は如何爲ようを云ふのかつてお云ひなすつたでせう。ですから、今夜にも決するが可いつて仰有るのなら、」「

「其がお前の誤解なんだよ。私は其様意味で云つたんぢやアない。晝間の語を取消すこと云つても、謝罪すると云つても、お前が受け付けないから、お前は私が如何すれば機嫌を直して呉れるのかと云つたんだよ。」「

「所天は如何なさらうと、所天の御隨意ですは。御希望通放浪なさるのも可いでせうし、経験をお積なさる爲に何を爲さるも可いでせうし、私が御指圖する譯はありませんは。」「

「お前は何時までも其を忘れないんだね。放浪するのが希望だと云つたのも、経験を積む爲には人の夫にもなると云つたのも、藝術家としての或場合を想像して、久能木に悔なからしめようと思つて、」「

「其は違ひますでせう。」「ど、紫瘦の語を遮つて、今少時は久能木を調戲ふ意だと仰有つたでせう。其が今では、悔なからしめたい爲だと變つたんですか。後悔なさる事の無い様にツて御親切と、調戲ふ意と仰有る御心持とは、大變に異やアしないかと思ひますは。それに経験の爲には妻と同棲にも居ると仰有つた事だの、放浪するのが希望だ、心も趣味も同一の女があれば、共に放浪するのも妙だつて仰有つた事だのを、頃日お書きなすつた小説に思合せますと、私の胸に當る事はかすは。況て、自分で経験した事でなきや、筆を着けないで云つてらッしやるんですもの、」「



「其様事を仰有ると、久能木さんにお笑はれなさりはしなくって。久能木さんから又、君は先輩の眞似を爲てるんだってお云はれなさりはしなくって。」と、夫を見た眼には涙が見える。

「都根さん、お前は久能木にかぶれたんだね。苟くも夫たる私に對つて、何と云ふことなんだ。私を其様男だと思つてるのかね——他の眞似を爲てるばかりで、自信も無い主張もない男だと思つてるのかね。」と、紫瘦は覺えず肩を揚げ肩を益かした。

「所天は何を仰有るんです。」と、都根子が眼を見上げると、涙は唾を溢れつゝ美しい鼻に沿うて頬を流れる。

「お前は夫たる私を信じないで、久能木を信じてるんだ。さうでないものが、動もすると久能木の語を借りて、夫を攻撃する筈がないぢやないかね。」

「それは間違つてらしたつてよ。所天が久能木を調戲ふ爲だつたの、また友誼上忠告したんだのつて仰有ると、其場合で言を二つにも三つにもお用ななさる事になるでせう。言と心と表裏のある人の語は、他が決して信じないでせうよ。所天が自信があるの主張があるのつ

て仰有つたつて、私信じられなくつてよ。ですから、久能木さんが、君は先輩の眞似を爲てるんだつてお笑ひだつたぢやありませんか。私久能木さんがお笑ひだつたのを、不圖思合せたから、また久能木さんにお笑はれなさるなつて申したんですよ。所天は其を、私が久能木にかぶれたの、其語を借りて夫を攻撃するのつて仰有るけれども、それこそ誤解ですは。所天は何故さうなんでせう。私それが残念ですは。人の妻として、夫が笑はれるのを喜ぶものがあるでせうか。」と、頻りに涙を拭く。

「では何かい、お前は、私の耻辱はお前の耻辱だと思つてお呉れなかい。」  
「さうですとも。今は尙だ所天の妻ですよ。」

「お前が然様云つて呉れ、ば、私は實に嬉しいのだ。お前は私を夫と思つてるし、私もお前を妻と思つてるし、すれば何の仔細もない話なんだから、晝間の事なんぞは全然忘れる事にして、今朝迄の樂い境界に還らうぢやアないかね。私はお前と争ふのが實に厭なんだ。お前だつて好んで私と争ひたい事は無いんだらう。今夜の様だと、私は實に困つて了ふ。如何だね、お互に笑つ了つて、満らない事なんぞ忘れて了はう。ね、さう爲よう。」



都根子は眼を翳して黙つて居る。

紫瘦はまた眉の顰を深くして、

「都根さん、お前快く忘れて了つて呉れるだらうね。」

「私其様事は出来ません。一旦心に刻まれた悲哀なんですもの、所天の仰有る様に然様容易く忘れられるものですか。私は唯、所天に愛されて妻になつてゐるんだと思つてましたのに、経験の爲に妻にされてたんでせう。私はまた、唯所天を命と頼んで、ある限の愛を捧げて、太田武弘の妻として、幸福だとも満足だとも喜んで居たのに、それがさうでなかつたんでせう。女として、此程の悲哀が他にあるでせうか。容易く忘れられる事ですか。私は生涯忘れぬ事の出来ぬ悲哀を、心に刻まれたんです。所天が忘れろと仰有つたつて、私到底忘れる譯にまゐらないのですよ。」

都根子の眼には何時か涙が乾いて、異様な光が見える。

「では、私がお前を愛して居ないで云ふんだね。」

「さうです。」

「いや、私が何時もお前を愛さなかつた事があるかね。お前と結婚をした時分も、今日も、私の愛は些も變つてないんだよ。」

「それは虚構です。」

「え、虚構。」

「さうですとも、虚構ですとも。」

「何で其様事を云ふのか。」

「所天が此頃お作りなすつた小説が、其證據です。」

「そんな事はない。」

「いえさうです。」

二人の眼は屹度見合された。

「所天は是でも私を愛して居らつしやるんですか。所天の小説は——それも去年の末からのですは——實驗以外の事は書かない、と云つて居らしやるんだから、中に書いてある事は残らず、御経験なすつた事はかしなんでせう。今氣が着いて見ると、私見たいな女も